

43383

教科書文庫

4
810
44-1924
20000 47790

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

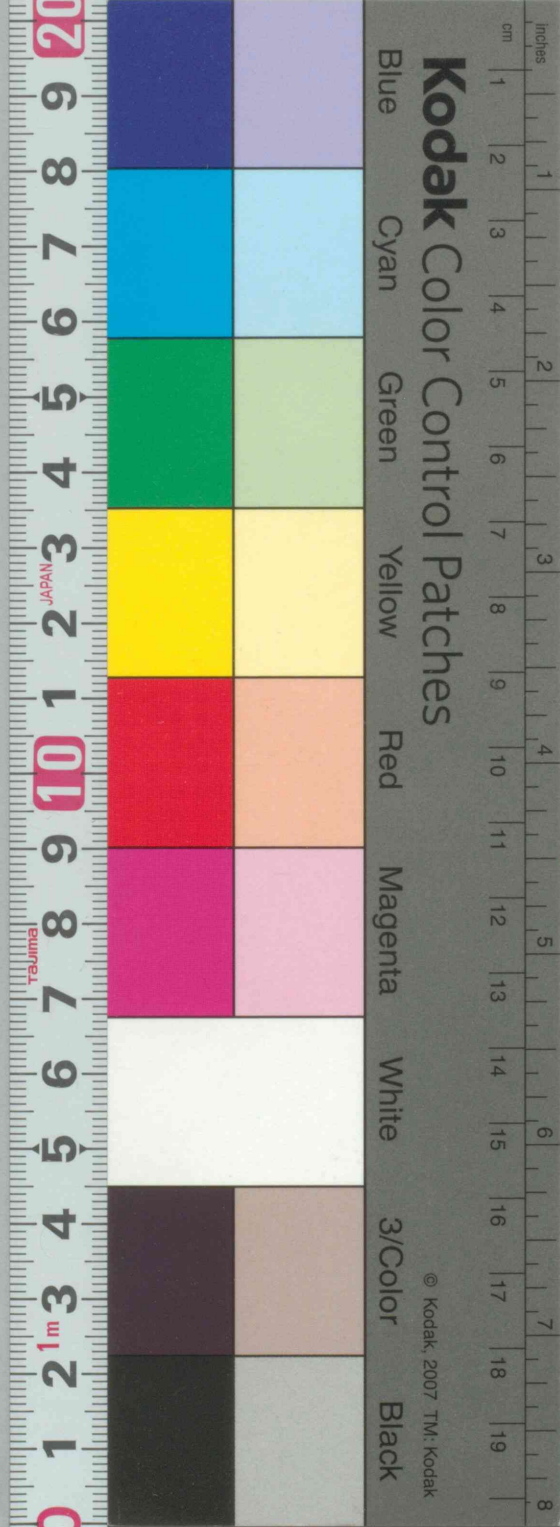


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Ya20  
資料室

# 現代 實業國語讀本

八波則吉編



東京開成館藏版



教科書文庫

4

810

44-1924

2000047790

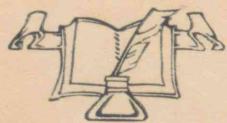
375.9

Ya20

中央図書館  
資料室

現代  
實業國語讀本

八波則吉編



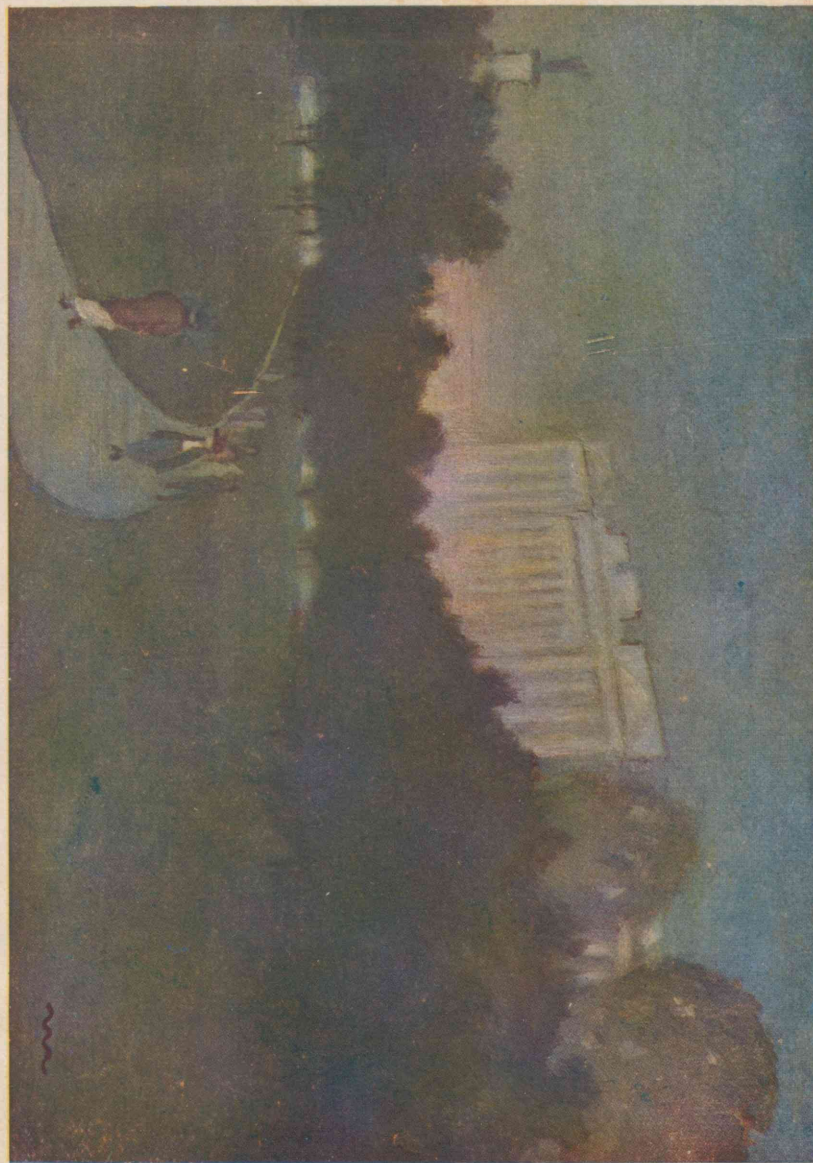
広島大学図書

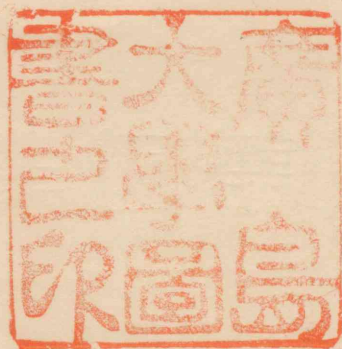
2000047790



東京開成館藏版

（カ）（ハ）（ニ）（ホ）（ロ）の巻





現代實業國語讀本 卷六

目次

前編

一	殖産興業……………	大隈重信……………	一
二	工業の戦争……………	秋山眞之……………	四
三	平和(詩)……………	土井晩翠……………	三
四	夢……………	夏目漱石……………	一四
五	夢の如し……………	坂本四方太……………	三〇
六	イタリーより(候文)……………	三矢宮松……………	三七

目次

七	霧のロンドン	野口米次郎	元
八	鎮守の森	笹川臨風	元
九	太陽民族の歌(詩)	(國詩選集)	四
一〇	潮待つ間	幸田露伴	四
一一	松葉仙人	(十訓抄)	四
一二	性格描寫		五
	一 我が兄		五
	二 我が父		五
一三	母に上る(候文)	大高源吾	六
一四	雪後(詩)	北原白秋	七
一五	雪の山里	橘南谿	七
一六	翻譯	日下部重太郎	八
一七	孝女白菊(詩)		八

中編

一八	扇の的	(平家物語)	九
一九	伊藤公を弔ふ	井上馨	九
二〇	ハルビンの朝嵐(詩)		一〇
二一	法難	坪内逍遙	一〇
二二	日蓮上人	高山樗牛	一〇
二三	世の中(和歌)		一五

一	言志録抄	佐藤一齋	一七
二	甘藷先生	原善	一三
三	單騎遠征	村上珍休	一五
四	憫農	李紳	一七

五	蠶婦	.....	一三
六	故事四則	.....	一三
七	勿頸之交	..... (十八史略)	一四〇
八	了伯聽平語	.....	一四
九	佐々木高綱	.....	一四三
一〇	那須宗高	.....	一四三
一一	詠史五首	.....	一四四
一	八幡公	.....	一四四
二	題常磐抱孤圖	.....	一四四
三	太田道灌借蓑圖	.....	一四四
四	題不識庵擊機山圖	.....	一四四
五	題兒島高德書櫻樹圖	.....	一四四

後編

一	現代の社會	.....	澁澤榮一	一四九
二	信仰	.....	釋宗演	一五五
三	源信僧都	.....	村上專精	一五七
四	喜悅(詩)	.....	野口米次郎	一六四
五	同胞兄弟	.....	(隱無情)	一六六
六	柳並木	.....	島崎藤村	一七五



現代實業國語讀本 卷六

前編

一 殖産興業

大隈重信

大隈重信  
佐賀縣の人、  
政治家、侯爵、  
大正十一年歿、  
年八十五

國家の興隆する所以は一にあらざると雖も、財力豊かなら  
ずんば、之を經營發達せしむること能はず。兵力充實すと  
も、民力富まざれば其の國勢は振はず。政府の財政は固よ  
り人民の富の程度を標準とす。日本の國家は施設すべき  
事業多くして、莫大なる國費を要し、又既に巨額の國債を負

擔せり。されば、國民たる者の忽にすべからざるは殖産興業なり。

我が國は古より農を以て國の本とするが故に、善く耕し、善く耘り、種子を改良し、肥料を精選して、農産の增收を圖らざるべからず。養蠶・牧畜に出精し、水産を増殖し、鑛物を採掘せざるべからず。森林も亦國家の富源にして、兼ねて水源を養ひ、洪水の憂を除くものなれば、之を繁茂せしめざるべからず。海陸交通の便を加へ、蒸氣・電氣・瓦斯・水力等の自然力の利用を大いにせざるべからず。而して諸般の技術を精鍊し、商工業を振作し、貿易を殷盛ならしむる等、凡べて國富を増益し、國力を發展すべきものは、孜孜として之を努

めざるべからず。國家の富力は其の信用の根柢なり。

由來我が國は天然の美に富むを以て、名勝舊跡その他風光の地は須らく之を保存して、彌その美を發揮せしむべし。

一民心を安定  
スル之事何  
レ之所より  
手を下すべ  
きや

大隈重信筆蹟

山紫水明の境通  
信運輸に便にし  
て、保養・行樂にも  
宜しからば、其の  
地は世界の公園

たらん。風景は國家の裝飾なれば、之を暴殘すべからず。凡そ殖産興業に必要なるは、資本主と労働者との一致協力なり。例へば、地主は小作人と相助けて農産を豊かなら



しむるが如く、百般の生産業は資力と勞力との協同に頼りて始めて繁榮を致すものなり。(國民讀本)

## 二 工業の戦争

秋山眞之

最近の歐洲大戰の實況を視ると、海戦は勿論、陸戦でも、機械の力が七分通り働き、人間の方の働は残りの三分ぐらゐなもの、寧ろ人間が機械に使役されてゐるかの觀がある。海戦の要素が主として機力であることは、今更いふまでもないことで、砲・煩・水雷・探照燈などが已に機械であるばかりでなく、之を裝載する軍艦・驅逐艦・潜水艦その物が又大きな意味での兵器で、働くにも、走るにも、攻めるにも、防ぐにも、

秋山眞之  
松山市の人、  
海軍中將、大  
正七年歿、年  
五十一

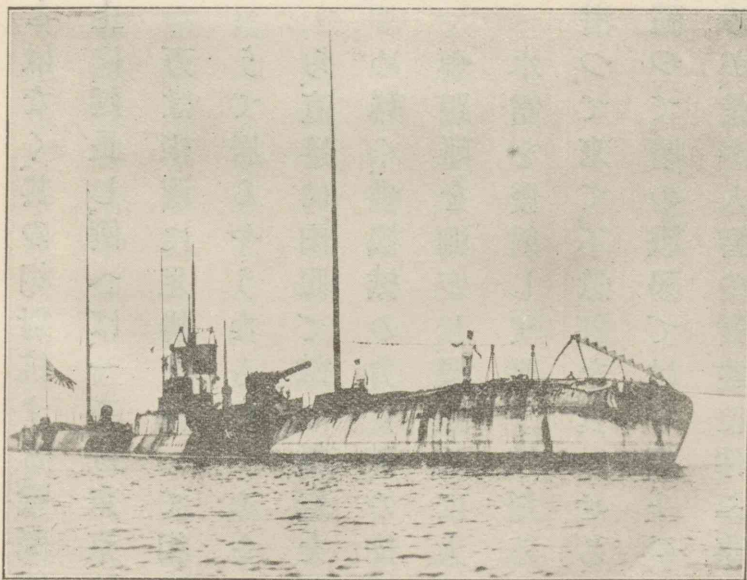


秋山眞之

一として機力に依らぬことはなく、其の相對抗する戦闘距離も、今日は最早十海里以上に延長し、例へば、一方は東京、他方は横濱に足場を構へて相戦うて居るやうなものであるから、直接に肉眼で敵の艦影を認め難く、唯機械の力で敵の位置や距離を測定し、機械的に大砲や水雷を發射して戦うて居ると、潜水艦が水中から間近く潜つて來て、不意打を食はせるといふやうな有様である。随つて、晴の戦場では、甲板上の勇士は稍張合のない譯であるが、是が人智の發達に伴ふ事物

の進化であるから致方がない。

陸戦の方も、今日は海戦同様に、機力的に變化するやうになつた。小銃、野砲は勿論、機關銃、野戰重砲、榴彈砲、塹壕砲のやうな直接の破壊兵器が皆機械的であるばかりか、塹壕を掘る開鑿機も、地雷の坑道を穿つ鑿岩機も亦機械的で、其



潛水艦

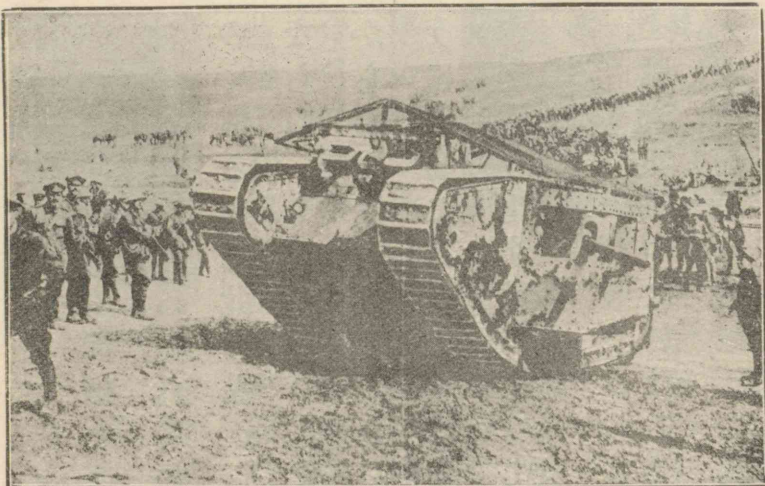
の開鑿機も今は一時間に三哩も掘れるものが出來たさうだ。故に、鐵條網で固めた十數線の塹壕を、無數の重砲彈で地均ししながら攻撃前進する間に、はや其の前に新塹壕を設けて防禦されるのであるから、敵味方共に攻撃の捗らないのも無理はない。

又、戦線附近の軍隊輸送、その他、重砲、糧秣などの運搬は、大部分は自動車の機力に依るもので、是がなくては歐洲大戰のやうな大陸戦をすることは出來ない。ドイツ軍が當初破竹の勢でベルギーから佛國に侵入し、パリも危くなつた時、パリの防禦軍は數萬の徵發自動車に分乘して、ドイツ軍の右翼に迂回し、其の側背を脅威攻撃した。是が功を奏し

マルヌの勝利  
マルヌは佛國  
東北部を流れ  
る河、西曆一  
九一四年九月  
六日から十日  
までこの河域  
で獨佛の會戰  
があつた

て、かのマルヌの勝利となつて、遂に敵軍を撃退することが出来たのであるが、若し當時パリに徴發することの出来る自動車があつたならば、佛軍の此の作戦は出来なかつた譯である。又、ドイツ軍が約八箇月間數十萬の犠牲を供して奪取に執着したヴェルダン要塞が、遂に能く持ちこたへたのも、一つは自動車の功である。當時ヴェルダンに通じる二線の鐵道は破壊され、佛軍の増援、軍需の補給などは、悉く後方十數哩の一村落から差立てた一萬有餘の自動車に依つたものである。

それから、敵情偵察や彈着觀察に無くてはならぬ飛行機もやはり、其の全體が機械である。佛軍の強かつたのも、一



つは其の優勢な飛行機で能く敵情を知り、且重砲の効果を發揮することが出来たからである。其の他、英軍が始めて戰場に持出してドイツ軍に一驚を喫しさせたタンクも、全く機械の應用であつて、英人が之を陸上の弩級戰艦と稱して居るのも當然である。

かやうに、海陸軍の戰鬪力の出處を穿鑿して見ると、大部分

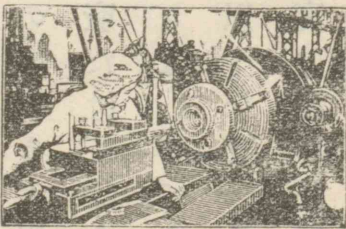
は機械である。そこで、今日の戦争は機械の戦争であるといへる。又、其の機械を運轉して居る原動力からいふと、石油の戦争である。此等の機械は皆内地工業の産出したものであるから、此の點から見ると、又工業の戦争といはねばならぬ。そして、其の工業は人間の營んで居るものであるから、結局はやはり人力の戦争となるのであるが、従前のやうに、戦場に立つて、外で働くばかりでなく、内て兵器・彈藥などを送り出す者が、却つて重要な間接の戦闘員になるのである。

歐洲大戦中に於ける英佛諸國の實狀を見ると、十七八歳から五十七八歳までの男子は、大抵國民兵となつて出征し、



佛國の女子郵便集配人

各軍需工場で男子が不足すると、數多の女子が之に代つて、随分烈しい力業をなし、老人や子供は其の製作品の荷造や積出をしたのである。即ち女房や



兵器廠で働いてゐる英國婦人

娘の造つた彈藥で、其の亭主や兄が敵と戦争するのである。今日は戦争までが夫婦親子の共稼となり、敵に對して間接・直接の相違はあるが、眞正の國民皆兵主義が自然に實現さ



英國の女子郵便集配人

れるやうになつた。

我が國も他日かやうな戦禍に遭遇したならば、やはり此の通りに、男女・老幼を

問はず、舉國皆兵で事に當るより外はない。然るに、現在のやうな工業の程度では、人間はあつても道具が揃はず、人口七千萬の中、大半は戦争の役に立たないで、唯餘計な心配をして見て居るだけであらう。英國のやうに、民間の工業があつてさへ尙不足を感じて、新規に増築や擴張を斷行し、戦前の工業力の三四倍にもしたぐらゐである。此のやうな大規模の戦争に對して、我が國の官立陸海軍の工廠だけでは、なほ其の軍需の十分の一ぐらゐを充たすに過ぎないのである。多少平時の準備があつたとしても、半年以上を支へることは覺束ない。自分は此の點から見て、切實に我が民間

工業の發達を希望して止まないものである。

三 年 和

土井 晚翠

土井 晚翠  
名は林吉、仙臺市の人、明治四年生、英文學者、第二高等學校教授

海よ黄雲の波を沸けり  
空に霞をたれ染めて  
朝よ霞のけしきを  
大いなるその彼より

海ようらむく霧をてり  
そらにうらむく霧をてり

夕陽はまたも早るをばあ  
 んよあえつそれむわのうら  
 うるけきもたふはよあり  
 おほいなるその光を射  
 籠るるもの色を持ちあて  
 夕よみくらなるやと平和  
 をはかりくく日浅羨い  
 日は多すあるをれをそふ

四 夢

夏目漱石

夏目漱石  
 名は金之助、  
 東京市の人、  
 文學者、東京  
 朝日新聞社員  
 大正五年歿、  
 年五十

何でも大きな船に乗つて居る。其の船が毎日毎夜少し  
 の絶間もなく黒い煙を吐いて、波を切つて進んで行く。凄  
 じい音である。けれども、何處へ行くんだか解らない。只  
 波の底から焼火箸のやうな太陽が出る。それが高い帆柱  
 の眞上まで来て、暫く懸つて居るかと思ふと、何時の間にか  
 大きな船を追越して先へ行つて了ふ。そして、仕舞には、焼  
 火箸のやうに、じゅつといつて又波の底に沈んで行く。其  
 の度に蒼い波が遠くの向ふで蘇枋すけりの色に沸返る。すると、  
 船は凄じい音を立てて、其の跡を追掛けて行く。けれども、  
 決して追付かない。「此の船は西へ行くんですか。」或時、自  
 分は船の男を捕まへて聞いて見た。船の男は怪訝な顔を

して、暫く自分の顔を見てゐたが、頓て「何故」と問返した。「落行く日を追懸けるやうだから」と答へると、船の男は「何々」と笑つた。さうして、向ふの方へ行つて了つた。「西へ行く日の果は東か、それは本眞か。東出る日のお里は西か、それも本眞か。身は波の上、檣枕。流せく」と囃して居る。其の舳へ行つて見たら、水夫が大勢寄つて、太い帆綱を手繰つてゐた。自分は大變心細くなつた。何時陸へ上られるか解らない。さうして、何處へ行くのだか知れない。只黒い煙を吐いて、波を切つて行くことだけは慥かである。其の波は頗る廣いものであつた。際限もなく蒼く見える。時には紫にもなつた。只船の動く周圍だけは何時でも眞白

に泡を吹いてゐた。自分は大變心細かつた。こんな船に居るより、いつそ身を投げて死んで了はうかと思つた。乗合は澤山ゐた。大抵は異人のやうであつた。併し、色々な顔をしてゐた。空が曇つて船が揺れた時、一人の女が欄に倚掛つて頗りに泣いてゐた。眼を拭く手巾の色が白く見えた。併し、身體には更紗のやうな洋服を着てゐた。此の女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと氣が付いた。或晩、甲板の上に出て、一人で星を眺めてゐたら、一人の異人が来て、天文学を知つて居るかと思つた。自分は詰らないから死なうとさへ思つて居る。天文学などを知る必要がない。黙つてゐた。すると、其の異人が金牛宮の

頂にある七星の話を聞かせた。さうして、星も海もみんな神の造つたものだと言つた。最後に、自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙つてゐた。或時、サルーンSaloonに這入つたら、派手な衣裳を着た若い女が向ふむきになつて、洋琴ピヤノを弾いて居る。其の傍に、背の高い立派な男が立つて、唱歌を唄つて居る。其の口が大變大きく見えた。けれども、二人は、二人以外のことにはまるで頓着してゐない様子であつた。船に乗つてゐることさへ忘れてゐるやうであつた。自分は益、詰らなくなつた。到頭死ぬことを決心した。それで、或晩、あたりに人のゐない時分、思ひ切つて海の中へ飛込んだ。所が、自分の足が甲板を離れて、船と縁が切

れた其の刹那に、急に命が惜しくなつた、心の底から止せばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は厭でも應でも海の中へ這入らなければならぬ。たゞ大變高く出来てゐる船と見えて、身體は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。併し、捕まへるものがないから、次第々々に水に近付いて来る。いくら足を縮めても近付いて来る。水の色は黒かつた。其の中、船は例の通り黒い煙を吐いて通り過ぎて了つた。自分は何處へ行くんだか判らない船にでもやつぱり乗つて居る方がよかつたと始めて悟りながら、而も其の悟を利用することが出来ずに、無限の後悔と恐怖を抱いて、黒い波の方へ靜に落ちて行つた。(夢十夜)



坂本四方太  
號は文泉字、  
鳥取縣の人、  
俳人、大正六  
年歿、年五十  
五

五 夢の如し

坂本四方太

城下の町の外廓は、緩かに流れる運河で帶のやうに取巻かれて居る。終日荷舟が上る、筏が下る。末は大川に合して港まで出るのである。秋の末になると、大根舟が橋の上手、下手に一杯に舫ふ。此の時が一年中で最も河の景氣の立つ時で、市中の人々は澤庵漬の仕込の爲に、皆此處に集つて大根を買入れるのである。舟のあるじは近在の百姓ばかりだが、買手は士族も町人も無差別に出て来る。只ざわざわと無暗に賑かだ。大根を舟から揚げるもの、擔つて町の方へ運ぶもの、千んで價を争ふものなど、河岸の兩側は人と大根で以て全く道が塞がつて了ふ。

大根の季節になると、橋向ふの饅頭屋が忙しくなる。蒸立ての湯氣立つ饅頭は、店に並べる間もなく端から賣れて了ふ。後からくと買手が詰掛けて来る。幾ら拵へても間に合はぬ。店番は泣顔になつて、腹立てる客に詫をいつて居る。饅頭の名を入舟饅頭といふ。白いのと黄色いのとあつて、形は入舟とも出舟とも見られる。

自分は祖父と一緒にたびく此の饅頭屋に遊びに来た。饅頭を買ひに来るのではない、自分の眞實の叔母の家だからである。やはり士族の商法で、叔母は後家の身でありながら、五六人の家族の中心となつて饅頭屋を始めた。家のもと定府の侍で、お爺さんは江戸つ子だ。頭を圓めた、十徳

を着た、柔和なお爺さんだ。いつも店に出て手傳つて居られるが、言葉が解りにくいので、自分はあまり親しまなかつた。祖父はお爺さんとは歌詠み友達なので、來るとすぐ打連れて、離座敷の方へ這入つて了ふ。自分は店に残つて遊ぶのである。入舟饅頭といふ名は、風雅な江戸つ子のお爺さんが、場所柄に因んで附けたのであらう。或は入舟饅頭といふものが昔江戸の何處かにあつたので思付いたのかも知れぬ。

叔父は、叔母が嫁入つて來て間もなく、西南戦争が起つたので、官軍の小隊長として出陣したが、敢なく田原坂たはらざかで名譽の戦死を遂げた。叔母は悲歎の中に、一人の形身の八重さ

田原坂  
熊本縣

んをせめてもの慰めにして、舅の江戸つ子のお爺さんに孝養を盡した。饅頭屋を始めたのは餘程冒險的であつたさうだが、幸にも珍しい物好きの市中の人気に投じて大當り。叔母はこれに力を得て、一所懸命になつて居る。團子を捏ねる、餡を煮る、蒸籠を天井に間へるほど積重ねて蒸立てる。殆ど叔母一人で切廻して居る。忙しい時には家内總出て、板の間の大井を取巻いて手傳ふ。時にはお爺さんまでが大井の廻りに蹲んで、團子を掌で押延べて居られる。押延べられた饅頭の皮が井の縁に幾枚となく並ぶ。叔母が端から取つて餡を入れる。餡を入れて二つに疊めば入舟が出来る。それを蒸籠に移して、釜の上に積上げるのだ。蒸

せた饅頭は下から引外してもや〜と立つ湯氣と共に店臺の上に運ばれる。茲に始めて白い入舟と黄色い入舟が美しく並べられる。

どさくさして居る中に、八重さんが學校から歸つて來る。言ふまでもなく八重さんは自分の従姉で、年は自分より二つばかり上だ。店の方から上つて來て、ぐちや〜と體を疊むやうに坐つてお辭儀をする。眉を隠すばかりに生え下つた切前髪をうるささうに拂つて、叔母に何かをねだる。叔母は店の饅頭を取つて、自分と八重さんに二つづつ呉れるのである。いゝ遊び連れが出来たと思つて居ると、八重さんは自分にお構ひなく、離座敷の方へ行つて琴を浚へる。

お師匠さんが來て居ることもある。お師匠さんは、鼻の尖に痘痕のある、聲のしやがれた盲だ。光つた頭を振立ててイヤ、トッテン、ソレ、ツンテンと、勢ひ込んで教へる。八重さんは懶げに師匠の不透明な白い眼を見上げながら、ぼつんぼつんと弾いて、時々體を斜に左の手を伸して、窮屈さうに琴柱の向ふを押へる。師匠は獨り悦に入つた面持で、白眼を吊し上げて弾立てる。一段濟むと、八重さんが自分に眼くばせしてにこ〜笑ふ。師匠は額の汗を拭きながら、坊様、今日はお祖父様は、と意外なことを言ふ。自分は拔足で來て黙つて見てゐたのに、彼は自分の居ることをちやんと知つて居る。而も八重さんが右にあつた煙管をそつと左

に置換へて、ほくそ笑んで居ることはまだ知らずに居るのだ。頓てもと煙管を置いてあつた處を探つて、無いのに始めて氣が付いたらしく、馬が小便を嗅いで笑ふ時のやうな顔して、またお嬢様が悪さをなさる。と言ふ。叔母が茶を入れて来て、此の體を見て、八重さんをたしなめる。八重さんは逃げるやうに廊下を走つて店の方へ行く。「富さん、御苦勞様。お茶を一つ、こゝに置きます。あの通り八重はいたづらで困る。この兒は靜かて大人しいから、丁度取替へると善いと思ひます。」と言ふ。師匠は挨拶に困つたか、あははと笑にごまかして、お茶を戴いて飲む。何やらてれるやうな氣がするので、八重さんの方へ行つて見る。八重さん

が饅頭を食つて居るから、自分も亦貰つて食ふ。(ほととぎす)

三矢宮松  
山形縣の人、  
明治十三年生  
朝鮮總督府警  
務局長

ムツソリニ  
イタリーの内  
閣總理大臣  
(1883—)



六 イタリーより  
イタリーにては、ヴェニス・ヴェネツィア

三矢宮松

フロレンス・ローマ・ナポリ(ポ  
ンペイ)ゼノア・ミランの六地  
方を見て、美術・歴史・風俗等に  
深く興味を覚え申候。

ムツソリニの新政府は非  
常なる意氣込を以て國政刷  
新を企て、其の意氣真に愛す  
べく敬すべきものに候。彼は毎朝五時に起き、お雇の教

師を相手に撃劔を使ひ、七時には政勢に就き、夜は深更にまで及ぶ由にて、坐るに當年の那翁を思はせ申候。

ムッソリニの三大綱領として國民に訓令したる所、即ち「大いに働くべし。」「節約すべし。」「規律を守るべし。」「の三事は、確にイタリー國民に對する名案に候はんも、之によりて直ちにイタリー人が此の三事を實行すべしとも思はれず、又、外政に於ては、殊に國威の發揚を期待する趣に候へども、如何なる名案あるべきか、少しく無理なるが如くにも被存候。乍併、兎も角もイタリーは官吏も國民も氣分が非常に新たになりて、大いに努力することを期し居る由に候。私の面會せる管船院總裁ともいふべき人は、ム

ッソリニの股肱の一人なる由に候が、港灣制度なども今後一新する心組なれば、現在の制度を調査しても、或は無用に歸するやも知れず。」と語り申候。又、「トリエストに對しては大いに中央集權の制度を施すべく、ゼノア港の自治制は之を廢止する考なり。」と申候。

イタリーの近き將來に於て、此の人達の努力が果して如何なる成績を顯すべきかは、頗る興味多き見物なるべしと被存候。（後略）（港灣に據る）

### 七 霧のロンドン

野口米次郎

僕がパリを辭し、オステンドからドーヴァー海峽を渡つ

野口米次郎  
愛知縣の人、  
明治八年生、  
英文學者、詩  
人、慶應義塾  
大學教授

て、鐵路ロンドンへ着いたのは、冬に入つた十二月某日だつた。十年目で再び見るロンドンの霧！ 僕の心はどんな



野口米次郎

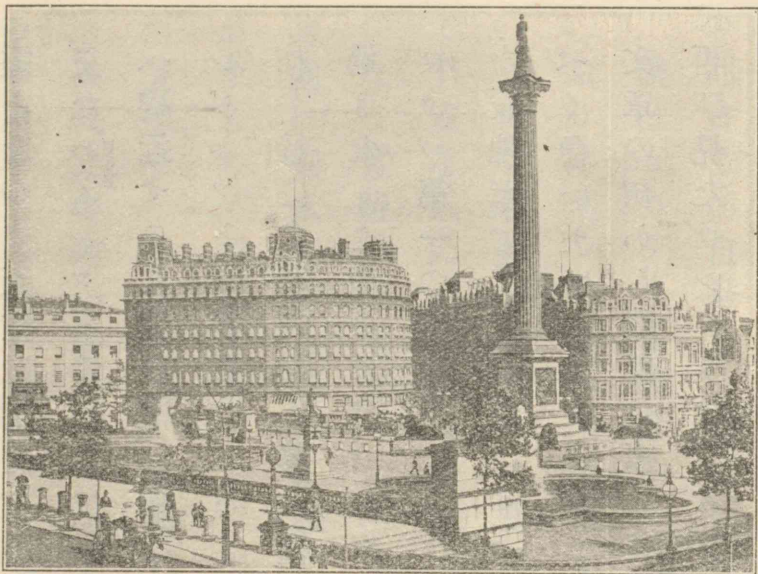
不安と喜悅で震へただらう！ その時の滞英日記に、次のやうに書いてある。

「漂流した古材木の一断片のやうに、僕はロンドンの中へ投出された。耳を

劈く大都會の聲！ 此はライオネル・ジョンソンが歌つたやうに『或者は高慢な、また或者は悼ましい呼吸をしながら死へと急ぐ進軍の聲。』である。ロンドンに果して僕

ライオネル・  
ジョンソン  
アイルランド  
の詩人

ネルソン  
英國の水師提  
督(1758-1805)



トラファルガー・スクエア

に對して笑ふだらうか、將亦濫面を作るだらうか。見よ、ロンドンは一面に霧の灰色で包まれて、寧ろ非現實的な外觀を呈して居るではないか。トラファルガー・スクエアのネルソンの銅像は、さながら海上に立つて居るやうに見える。否、深い霧のために

ハムレット  
シエークスピ  
ヤ作の戯曲中  
の一人物

トムソン  
イギリスの詩  
人(1834-1882)

靈となつて天空に消えるかとも思はれる。僕は幽霊を  
見たハムレットのやうに、おづくしながらスクエーヤ  
へ接近すると、背の高い瘦せた女に呼掛けられた。『サフ  
レジュット一部買つて下さい!』僕は心の中で、あゝこ  
れが音に名高い婦人參政權運動者だなと思ひながら行  
過ぎた。このトラファルガースクエーヤを、或人は、『ヨー  
ロッパ第一の勝地だ。』といひ、また或人は、『土湮青の無趣味  
な荒地だ。』といふ。僕はすたこら今夜眠る旅館を求め  
べく急いだ。

文章の初から引用が多くて聊か恐縮するが、僕が十年目  
に再び見たロンドンThomsonは、トムソンが歌つたやうに、『恐しい夜

の都會「それ自身——霧のロンドンであつたのである。

僕はピカデリー附近の一旅館に落着いた。けれども、久

Piccadilly

しぶりにロンドンへ来たことであるから、容易に眠られな  
い。再び着物を着替へて、霧の夜景を眺めに旅館を飛出し  
て、平安ならぬロンドンの坦々たる大道路ピカデリーを下  
つた。暫時歩いて、左手にあるグリーンパークへ踏込んで、  
Green Park

其處に据ゑてある椅子に腰掛けた。靴の下でがさく音  
がするので、電燈の光でよく見ると、冬であるのに、青々とし  
た芝生! 少々古風な修辭だが、僕は「冬なほ青い草のやう  
に永久に年若い新鮮なロンドン」を祝福した。歸路に就い  
たのは十二時近くだつた。ピカデリーサーカスの方から  
Piccadilly Circus

リゼント街を見渡した光景は、實にヨーロッパに於ける最も壯大な觀物の一である。殊に霧の夜、人の往來も少くなつた時刻に見れば、その偉觀が一層水際立つて浮いて見えるのを感じる。

ロンドン到着後一週間ばかりは、毎日朝から「霧のロンドン」だつた。其の頃、僕がウェストミンスター・ガゼットに寄稿した小品文の中に、次のやうな文章がある。

「僕は或朝 Monument トライトを指して歩いた。ぼて〜として、魚か何かのやうに泳いででも居るのではないかと疑はれるやうな霧が、狭い道路を流れて居る。頭を舉げると、兩側の高い建物

が、丁度耳語でもして居るかのやうに、雙方から肩を接近させて居る。そして、其の霧の中を、金に餓ゑた魑魅魍魎が走つて居る！ これは冬のロンドンで最も特徴のある光景の一だ。それから更に僕を動かした一光景を語りた。或友人に晚餐に招かれて、夜遅くランカスター・ゲート停車場で、地下鐵道の列車を待つてゐた。地下幾千呎の穴の中、而も夜が更けて居るから、乗客は一人も居らぬ。僕は、この時、今までに感じたことのない、不思議な皮膚をみしく〜と噛むやうな沈黙に觸れた。この沈黙は自然が産んだ沈黙でなく、近代の科學が産んだ不自然な沈黙である。若し出る穴が突然塞がれ、ば、どうした



らよいかと思つて戦慄した。此處はきつと地獄へ近いだらうとも思つた。「深夜の地下鐵道の沈黙」——これは近代の新詩人が歌ふべき好題目だ。」

ロンドンの冬に霧がなかつたならば、ロンドンの建物はどんなに其の美觀を減じるだらう。僕が滞在してゐた旅館の附近には、國民美術館があり、又僕がロンドンの寺院中で一番好きなセントマーチンズインザフィールズがある。この小寺院は、建築上から論じて、ロンドン切つての建物として尊重すべきものだ。それが霧に包まれた場合には、眞に夢のやうな非現實的な美しい趣致を添へるのである。大英博物館なども等しく多大に冬の霧の恩恵を受けて居

St. Martin's in the Fields

サッカレー  
英國の小説家  
(1811-1863)



サッカレー

る。霧があればこそ、その建築に薄暗い滋味が付き、霧を通して見ればこそ、それが如何にも莊嚴で又氣高い印象を與へるのである。僕は、冬の霧の大英博物館を訪うて、思ひも

寄らぬ稀觀の光景に接する機會を得た。僕がその圖書室へ入つた時、不圖英國人と産れて、此等の書物に手を觸れ、且その中に含まれてゐる眞理を味ふことが出来ることに對し、心からの

祈禱を捧げたい。」といつたサッカレーを思ひ出した。今僕は諸文豪の名前の刻してある圓天井へと階段を上つて居る。かういふ高い場所からつと下の讀書室を眺めおる

した光景——霧の冬のことであるから、時間は午後四時前後であるのにも係らず、幾百といふ青黒い笠を冠つた電燈が點いてゐて、それが机の上へ丁度小さい水溜のやうな影を落して居る。それは實に美觀だつた。頭を擧げると、世界に二つとない巨大な圓天井が沈黙を包んで居る。僕は此の時この驚異すべき莊嚴と雄麗とに打たれて、一時知覺を失つたといつても決して誇張でないと思ふ。併し、時が霧の冬でなければ、僕の感じはかう嚴肅莊重なものではなかつたに相違ない。僕は霧の冬のロンドンの光景を詳細に見たことを感謝する。(霧の倫敦)

笹川臨風

名は種郎、東京市の人、明治三年生、文學者

### 八 鎮守の森

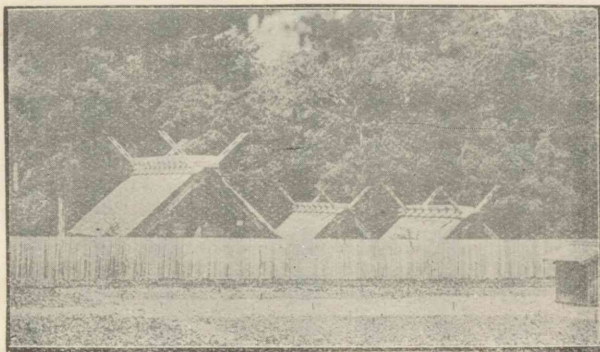
笹川臨風

見渡すかぎり蕭條として、田も畠も霜枯の風情見る影もなき間に、ひとむらこんもりとして綠鬱蒼たるは鎮守の森なり。金も石も燦けんばかりの夏の眞晝中に、一陣の涼風殿角より起りて、社前の注連繩さらくと鳴れば、此處は子守・田夫等の安樂世界となりて、拜殿に晝寢の夢まどかなり。春のあしたには、祠前一二株の彼岸櫻咲きこぼれて、一村に花信を傳へ、秋のゆふべには、社後の蔦葛紅に染まりて、夕日の色も眩し。花おぼろなる曉、月あかるき夜、松杉暗くして、瑞籬のほとり神さびたり。詩趣ひとり此處に饒かにして、何事のおはしますかは知らねども、いとかうくしく覺ゆ

何事のおはし

ますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ(四行法師)

るなり。

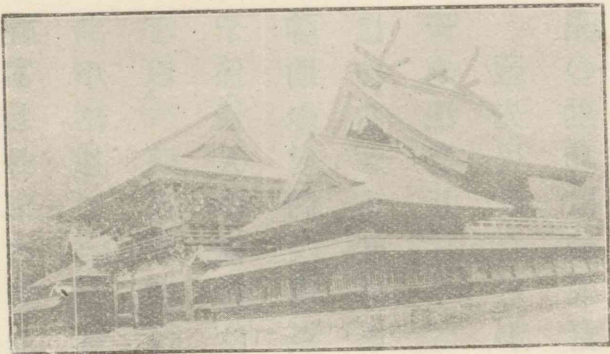


伊勢大勢廟

處たるなり。

日落ちて月漸く上る時、涼を趁ふ村人の影婆娑として、鎮守の森は忽ち舞踏場と化するなり。祠頭の旗幟翻々として、風に靡く時、滿村の老幼織るが如く、鎮守の祭禮は一歳中またと得がたき歡樂なり。年豊かなれば詣り謝し、天早すれば雨を乞ふ。まことに鎮守の森は一村の望を集め、一郷の中心として、最も神聖なる而も最も面白き

鹿島神宮  
官幣大社  
香取神宮  
官幣大社  
宇都宮二荒神社  
國幣中社



出雲大社

斯かる鎮守の森にいます神は、多くは其の土地その土着の民と何等かの關係あり。溯つて之を考ふれば、氏族・部民が其の祖先を祀りたるものも少からず。社格は郷社・村社などなるが、官幣・國幣の神社は、畢竟鎮守の森の大きいなるものなり。鹿島・香取の神宮は武甕槌神・經津主神の子孫が創めたるところにして、宇都宮二荒神社は毛野君の一族が其の祖先を祀れるところなるべし。其の一層大いなるものには、出雲大社あり、其の最も大いにして日本

の鎮守たるものには、五十鈴川の上に千木高知れる伊勢大神宮もあらせ給ふなり。

小にしては一村の中心となり、大にしては帝國の中心となる。祖先の神靈、前賢の英魂は長へに鎮守の社に留りて、子孫後人の精神に通ひ、彼等をして奮勵自彊せしむ。天祐神助の信仰は勇氣鼓舞の最良法なり。而も信仰とは權道にあらず方便にあらずして、直ちに神に接し靈に感ずる唯一の法なり。

祖先崇拜なるかな。是獨り原始の觀念のみにあらず、祖先の勳功は後人奮勵の料たり、子孫の名譽心を發揮すべき興奮劑たり。只其の崇拜をして保守的たらしむる勿れ、回

顧的たらしむる勿れ。進歩的たらしめざるべからず、自覺的たらしめざるべからず。

是に於てか、鎮守の森をして一層一村一郷の中心たるの實あらしむべきなり、更に神さびて神靈の窟たるに適せしむべきなり。之が爲には、苗樹を植ゑ、草萊を去り、祠宇を修め、園池を美にすべし。一村一郷の崇敬地たらしめ、遊樂地たらしめ、集會所たらしめ、心なき田夫にも美の觀念を與ふる所たらしむべし。小學兒童の運動會も之を中心として此の附近に行はしむべし。さゝやかなる村落圖書館の如きも此のほとりに設けらるれば最も妙なるべし。鎮守の森をして一村一郷の中心たるの實あらしむるは、蓋し風化

の上に得るところ極めて大いなるものあらん。

### 九 太陽民族の歌

進め自由の海を青々と力の濤をもつて

若き光の目覚めし民よ

真純なる曉の新しき聲を

日の稻妻に高く揚げ

光に溢れて生めよ殖えよ

燃ゆる久遠の太陽よ古き帝國よ

太陽こそ我等の生ける母きらめく鏡

無垢なる良心新しき力の泉

戦へ自由の日の子よ野生の日本よ

花に星に虹に善美の血を塗立てて

偉大なる日の光の島よ新しき力の國よ

人間神よ太陽の族よ火の旗鐵の胸よ

進め無限の光の運命の大道を

愛と自由と威力の劍に

高鳴る精神を響かせて生命の海を

太陽の兜を戴ける帝國よ朝の歡喜の島民よ

蒼海を走れる龍よ生ける國土よ  
 我が祖國よ甦れる自由の曙の島よ  
 祝へ真紅の太陽の大なる若き輝きを  
 進め光の島よ猛き日の子供等よ

深き波濤に舞出でてよ幸福なる船出の  
 日に美しき日本よ天より降り來れる愛の民よ  
 永遠の生命の土に四肢踏みしめて  
 狂猛なる世界の嵐の中に自由と正義を取れ  
 死を以て勇氣の絶頂に立つて  
〔國詩選集〕に據る

幸田露伴

名に成行、東  
 京市の人、慶  
 應三年生、文  
 學者、文學博  
 士

一〇 潮待つ間

幸田露伴

風に逆らひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流  
 に逆らひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯  
 春の日の潮の底りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時の  
 みは、意地にも工夫にも舟を操らん道なく、あだに心の焦ら  
 るゝものなり。

嘗て此のことを言出でて、さる折にも何とかなすべき手  
 段はなきにや。と、年老いて物事にいと巧者なる舟人に問ひ  
 けるに、舟人は打笑ひ、何時にても纜を解かんとすれば、何時  
 にても水あるところに船を繋ぐべし。我等は繋ぐ時には  
 解くことを思ひて繋ぎ、解く時には繋ぐことを思ひて解く。

これに反して、素人は繋ぐ時には解くことを思はず、解く時には繋ぐことを思はず。これを以て、歸らんとして歸る能はず、進まんとして進む能はず、徒に心を干潟に焦るやうのこともあるに至るなり。若し既に干潟にゐすわりたる舟となりたらんには、我等なりとて、其の場に臨みて何の手段かあるべき。たゞ少しは早くとも心長閑かに食事などすませて、頓て立働かん折に、足纏れのせぬやうに舟の中を取片付け、なほそれにて、時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚かしけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か一たびは爲さずして叶はぬことを爲しつゝ待たば、必ず來るべき潮は、大抵其

のことを爲し終へぬ程に早く來るものなり。何時か一度爲さずして叶はぬことは、小さき舟の中にて、もいと多きものなれば、潮待つ間に爲すべきことのなしといふはなし。潮待つ間に爲すべきことのあるを見出して之を爲さば、唯時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の焦らるゝことなどあるべくもなし。と言ひけり。面白き言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。(潮待ち草)

一一 松葉仙人

河内國金剛寺とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は五穀を食はねども苦みなし。能く食ひおほせつ

金剛寺  
河内國南河内  
郡天野村大字  
下里にある

れば、仙人ともなりて飛びありく。」といふ人ありけるを聞き  
て、松の葉を好み食ふ。誠に食ひやおほせたりけん、五穀の  
類食ひのきて、漸く兩三年になりけるに、げにも身も軽く  
なる心地しければ、弟子どもにも、「我は仙人になりなんとす  
るなり。」と常にいひて、今々として、内々にて身を飛びならひな  
どしけり。「既に飛びて上りなん。」といひて、坊も何も弟子ど  
もに分ち譲りて、「上りなば仙衣を着るべし。」とて、かたの如く  
腰に物をひとへ巻きて出立つに、「我が身には是より外は入  
るべきものなし。」とて、年比祕藏して持ちたりける水瓶ばか  
りを腰につけて、既に出てにけり。

弟子・同朋なごり惜しみ悲しび、聞及ぶ人、遠近市の如くに

集りて、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、この僧、片山  
のそばに差出でたるいはほの上に登りぬ。一度に空へ登  
りなんと思へども、近くまづ遊びて、事のやう人々に見せた  
てまつらんとて、かの巖の上より下に生ひたりける松の枝  
にゐてあそばん。といひて、谷より生ひのほりたる松の上、四  
五丈ばかりありけるをさけさまに飛ぶ。人々目をすまし  
哀れをうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、か  
ねて思ひしよりも身重く、力うきくとして弱りにければ、  
飛びはづして谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、こ  
れほどのことなればやうあらん、定めて飛上らんずらんと  
見るほどに、谷の底の巖にあたりて水瓶もわれ、又我が身も



散々に打損じて、只死にに死にぬれば、弟子眷屬騒ぎ寄りて、  
「いかに」と問へば、いらへもせず、僅に息の通ふばかりなりけ  
れど、とかくして坊へかき入れつ。こゝに集れる人、笑ひの  
のしりて歸りけり。

さて、この僧、あるにもあらぬ様にて痛み臥せり。とかく  
いふばかりなくて、弟子も恥しながらあつかふあひだ、松の  
葉ばかりにては命生くべくも見えねば、年ごろいみじく食  
ひのきつる五穀をもて、さまざまいたはり養へば、いのちば  
かりは生くれども、足手腰も打折りて、起居もえせず。今は  
松の葉食ふにも及ばず、もとの如く五穀むさぼり食ひて、弟  
子どもにゆゝしく譲りたりし坊も寶も取返して、かゞまり

おたり。(十訓抄)

## 一二 性格描寫

### 一 我が兄

俺を本當に理解してくれる者は、此の廣い世の中に、俺の  
兄唯一人である。——俺は兄に就いて何か言ふに當つて、先  
づ此の言葉を述べたい。

俺を理解してくれる唯一人の兄、彼は五尺の體軀、渾身熱  
情に燃えて居る火のやうな性格の持主である。一步の餘  
裕もなく、一分の隙もない。唯理想と向上の念に燃えて、自  
ら號して曙光といふ。

大様な坊ちやんとして育て上げられた彼は、彼の少年時代、一家の没落この方、急に一變して、精悍な氣、向上の念、あらゆる苦痛に嚴然として堪へることの出来る人となつたのである。逆境に在つて冷たい浮世と闘ひ、其の苦痛の經驗を嘗めて、彼の性格はいよゝゝ變化を加へて來た。彼は中學にも行かなかつた。家を思ひ、身を思つて、じつと唇を噛みしめて、「行きたい」とは一言も洩さず、黙つて彼の友の制服姿を見詰めてゐた。彼は一切を擧げて父を援けて、家運の挽回に努力して來た。

青年時代の彼はやはり人の子であつた。彼にも種々の煩悶はあつた。煩悶の結果、キリストを知り、釋迦を知つた。

國を知り身を知つた。さうして、又俺を知つてくれた。彼は零細な時間を利用して、色々なことを學んだ。ゆつくり落着いて勉強する時間を持たなかつた彼の知識は、或は新聞知識かも知れない。彼の友は彼を評して言ふ、鋭い先見の明と、深い人間味とに富んだ、さうして、冷たい理性と一般的の知識を豊富に有する受難者の一人だ。と。受難者——さうかも知れない。彼は自分を犠牲にして、一家を背負つて闘つて來た。甘んじて苦しい自分の運命を開拓して來た。同情心が深く、責任感が強く、人を信じるのに餘り度を過ぎるやうな點は母に似て居る。正義と意氣を愛する點は父に似て居る。彼は屈するといふことを知らない父と、

我儘な俺との間に立つて、何時も父と俺の衝突を調停し、俺の愛兄として俺を愛撫してくれた。又俺の爲に泣いてくれた。そして斷乎たる父の反對の下に、優しくも俺を庇つてくれて、俺を中等學校といふ新しい生活に入らせてくれた。二年前の秋、或薄ら寒い夕方、小さな行李を手にして、漂然としてK市へ向つて出發する俺を停車場に見送つて、堅く俺の手を握つて、「萬事は俺が引受けた。しつかり遣つてくれ。お前の新しい門出を心から喜ぶよ。」と言つて、俺を心から慰めてくれた彼の姿を、俺は今でもはつきり覚えて居る。乏しい自分の小遣の中から、不足ながらも毎月俺の學資を與へてくれるのも彼だ。俺は彼に對して感謝の涙を

士は云々  
士爲知己者  
死(史記)

拂はずには居られない。辛いこと悲しいことが俺を襲つて來る時、俺は何時も彼を思ひ浮べて、自ら慰め自ら勵まして行く。俺に取つては、彼は唯一の保護者であり、唯一の愛人であるのだ。「士は己を知る者の爲に死す。」といふが、俺は俺を知つてゐてくれる彼の爲に總べてを舉げて盡したい。世には骨肉相食む者もあるのに、彼は俺の爲に身を犠牲にしても俺を援けてくれる。俺は彼を兄として持つて居るといふだけでも幸福だ。

俺は斷片的にこんなことを述べたが、いくら述べたつて、到底彼の半面をも傳へることは出來ない。俺の眼に映ずる彼は、俺の平凡な筆で表し得られる程度に薄つべらなも

のでない。事實、彼は人々の眼には詰らないやうに見えるかも知れないが、俺には能く解る。彼は天と共に歩み、天と共に仕事をして居るのだ。彼には不平がない、不満がない。彼は唯一筋の理想への路を走つて居るのだ。

俺は徒に筆を弄して彼の人格を傷ふことを恐れる。俺はたゞ彼の健康と幸福とを祈つて筆を擱く。(禮生)

二 我が父

年少の折は、海軍志望者ばかりから成立つてゐた厳しい私塾の規律の下で身體を錬り、壯年に及んでは、狂瀾怒濤を凌ぎ、砲煙彈雨の中を潜つて膽を鍛へた父も、寄る年波には勝てず、近頃目立つて白髪が殖えたやうに思はれる。「此の

柴扉曉出

廣瀬淡窓の詩

第一二句は、

「休道他郷多

苦辛、同胞有

友自相親」

頃の若い者は上つ調子で困る。何と言つても便利な世の中だけに、苦勞の仕方が足りない。とは父の口癖だが、強ち年寄の愚痴とばかりは思へない。父が青雲の志已み難く、東都の祖父を頼つて出郷したのは、其の十一歳の時であつた。祖父は維新の際に身を抛つて國事に奔走した人、青年に對する躰の嚴しいことは言はずもがなである。「柴扉曉出霜如雪、君汲川流我拾薪。」天地も凍る冬の朝、釣瓶繩を手繰つて風呂水を汲む時、上長の暴慢に口惜涙を流す時、故郷に在す父母の暖い胸を思つたことであらう。父の餘慶に依つて、たとひ故郷を離れて居るとは言ふものの、仕たい放題を仕盡して、暢氣な生活を送つて居る僕は、實に仕合者である。

といはねばならぬ。

日露の役は父に取つて出世の階段であつたと共に、又父の身體に癒え難い打撃を與へたのであつた。若い時から人に後れを取つたことのない元氣は急に衰へ初めた。海上の勤務に堪へ得ないやうになつた健康は、父をして陸上の勤務に就くの已むなきに至らせた。戦後十年、父は故山に歸つて鋤・鋤に親しむ身となつた。「何事も身體が根本だ、心ばかり如何に逸つても、身體が悪くては思ふ仕事の半分も出來はしない。俺を見る、俺が良い手本だ。」僕が中等學校に入學するや否や、父は僕の意を専念體育に注がせようと努めた。先づ第一に、學校から歸つて來ると、直ちに裏の

畑に連れて行つて、耕したり、均したり、種を下したりして、晝間は唯土の香新しい大自然の懷に抱かれつゝ、父も僕も無言の中に、銘々の受持を濟ませるのを常としてゐた。犬ころも三年経てば三つになる。中等學校三年生の僕の體力は、最早父の敵でない。父が其の受持の半分も耕さぬ中に、僕の鋤先はもう父の領分に切込んで行く。「いや、俺はもう逆も御前には勝てぬわい。」と、歎息を洩す父の顔には、自己の衰へ行く體力を歎く悲痛の色は少しも現れず、却つて我が子の體力の日にくく増して行くのを祝福する親の愛情が溢れて居る。

一體父は俗に言ふ小忠實な人で、一日中こせくと動き

廻つて居る質の人間である。今畑に姿が見えてゐたかと思へば、もう風呂の下を覗いて居る。少し前までは奥の間から煙管を叩く音が聞えてゐたのに、もう何處へ出掛けて行つたのやら皆目解らぬといつた風で、一寸でも凝じとして居ることがない。「少し落着いて本でもお讀みになつては如何ですか。下廻りのことは私共が氣を付けますから。」と、母が見兼ねて言ふ度毎に、「俺は皆の知つて居る通り片眼不自由で、本を讀むには頗る都合が悪い。其の上、艦上生活をしてゐた時、部下に過失があつてはならぬと見廻りに心勞したので、到頭こんなこせくになつたのぢや。何も俺が風呂の下を覗いたからとて、嗚天下と思ふ者はあるまいよ。」

と濟したものだ。併しながら、父の此の習癖は、艦上生活の爲ばかりではなくて、段々年の寄つて來たのと、公生活を止めて私生活に入つた結果、一日の大部分を家庭で暮すやうになつたので、勢ひ家人の缺點、手落がよく目に着くため、自身でも何時こんな癖が付いたのか解らぬほど、知らず識らずの間に形成されたもののやうに思はれる。父に限らず、公生活を止めて私生活に入つた人は、誰でも日々の生活に非常な空虚を感じて、從來の官途の劇務に相當する仕事を求めようと焦り出すらしい。口善悪ない雇人、手傳人等の話に、「何處其處の旦那様は臺所のことまで口喧しく仰る。」とか、「いや、何某様の旦那様は燐寸箱の中にある燐寸の數まで

調べていらつしやる。とか言ふのを聞けば、父のなどは、此の種の癖では最も輕微な部類に屬するもので、強ち氣に掛ける程のことではないのである。併し、官途生活中特に嚴格な軍務を退いた後の父の性情が、年一年と變りつゝあることは争はれない事實である。軍務を退いた後二三年間は、家庭に在つても頗る嚴格で、各自に對しても、無駄な遊を省いて、有用な仕事を勵むやうに強ひた。趣味とか娛樂とかいふものは全く父の念頭にないやうであつた。何でも其の頃の或晩日頃からハーモニカの吹奏に妙を得た僕の友人が遊びに来て、僕の望むまゝに二三回聞かして呉れたことがある。吹奏の間にも、茶の間で父が烈しく煙管を灰吹

に叩き付けて居るのが手に取るやうに聞えたので、聊か氣に掛つたものの「まあ偶には構はぬだらう」と、自分勝手な理窟を付けて、兎に角好きな曲を聞かせて貰つた。さあ其の後が大變で、友人が歸ると早速呼付けられて、三十分間ばかりも諄々と御説教を聞かされたのを覚えて居る。それが、一年経ち二年経つ中に段々和らいて來て、昨年の暑中休暇に歸省した時には「お前も老後に及んでも樂しむことの出來るやうな趣味を、今の中に養つて置いてはどうかだね」と、昔とは丸で別人になつたかのやうなことをさへ言ふやうになつた。又僕の修學狀態等に就いても殆ど無干涉で、時には鈍感を僕でも「もう俺は餘り見込がないから、父が見放し

たのではあるまいか。父に見放されては俺もお仕舞だが。」と、心細く思ふこともある。併し、いくら黙つて居るやうに見えても、父子間の愛情は言はず語らずの裡にお互の胸の中に通つて居るもので、僕が此の間の試験で首席を占めた時には、我がことのやうに喜んで呉れた。如何に叱られようが、恐しからうが、今日の僕に取つて、父より良い者は見當らない。「孝行のしたい時には親はなし。」白髪が年一年目立つて来る父の姿を見る毎に、「せめて父の存命中だけでも、十分な安心を與へたい。」との願が、ひしひしと僕の胸に迫るのである。(篠原生)

大高源吾

名は忠雄、赤穂四十七士の一人、元禄十六年(三六三)歿年三十二年  
殿様  
故主赤穂城主  
浅野長矩を指す

一三 母に上る

大高源吾

一、私事今度江戸へ下り申候存念、豫ても御物語申上候通り、一筋に殿様御憤を存じ奉り、御家の御恥辱を雪ぎ申度一筋にて御座候。且は侍の道をも立て、忠のため命を捨て、先祖の名をも顯し申すにて御座候。勿論大勢の御家來にて御座候へば、如何ほどか、御厚恩の侍も御座候處、さしての御懇意にも遊ばし下されざる人並の私儀にて御座候へば、此の節大抵に忠をも存じ、長らへ候て、そもじ様御存命の間は御養育仕り罷在候ても、世の謗あるまじき我等にて御座候へども、慙に御側近き御奉公相勤め、御尊顔拜し奉り、候朝暮の儀今以て片時忘れ奉らず候。



相手  
吉良上野介義  
央

誠に大切なる御身を捨てさせられ、忘れがたき御家をも  
思召し離され候て、御鬱憤遂げられ候はんと思召し詰め  
られ候相手をお討損じ、剩へ淺ましき御生害遂げられ候  
段、御運の盡きられ候とは申しながら、無念至極、恐れなが  
ら其の時の御心底推量り奉り候へば、骨髓に徹り候て、一  
日片時も安き心御座なく候。されども、御短慮にて、時節  
と申し、處と申し、一方ならぬ御不調法ゆゑ、公儀の御憤深  
く、御仕置に仰付けられ候ことに御座候へば、力及び申さ  
ぬこと、全く公儀へ御恨み申上ぐべきやう御座なき儀に  
て候ゆゑ、御城は仔細なく差上げ申したることに御座候。  
これ公儀へ對し奉り候て、異議を存じ奉り申さぬ故にて

大學様  
淺野長矩の弟  
長廣

御座候。併し、殿様御亂心とも御座なく、上野介殿へ御意  
趣御座候由にて御斬付けなされたる事にて候へば、其の  
人は正しく敵にて候。主人の命を捨てられ候ほどの御  
憤御座候敵を安穩に差置き申すべきやう、昔より唐土我  
が朝共に武士の道にあらぬ事にて候。それゆゑ、早速敵  
の方へ取掛け申すべき處、大學様御閉門にて候へば、御免  
なされ候時分、若しや殿様御跡少しにても仰付けられ、上  
野介殿方へも何卒品もつきて、大學様外聞よく世間も遊  
ばし候様にも罷成候はば、殿様こそ右の通りに候とも、御  
家は残り申す事にて候。然れば、我々は出家沙門となり、  
又は自害仕候ても憤は休め候はんと、此の節まで口惜し

簾た竹にわた  
がる雪の雀か  
な 千葉



き月日をも送り候處に、其の甲斐なく安藝國へ御座なさ  
れ候。閉門御許と申す名ばかり  
にて御座候。尤も歲月過ぎ候は  
ば、御世に出でさせられ候事も御  
座あるべく候はんか。よし左様  
に御座候とても、此の節にて殿様  
御跡は絶え申したる事に御座候  
へば、此の上前後を見合はせ申す  
は臆病の仕るところ、武士の本意  
ならぬことにて御座候。此の上  
にも公儀へ御訴訟申上げ、何卒相手方へ御手當も下り、大

大 高 源 吾 筆 蹟

學様にも世間廣く御取立遊ばされ下され候やうに、一命  
に懸けて御歎き申上げ、是非御取上なくば、其の時相手方  
へは取掛け申すべき由、切りに相談の衆も御座候。尤も  
一理御座候やうには候へども、なか／＼さやうの徒黨が  
ましき事仕るべき道理と存じ申さず候。其の上、御願申  
上げ、御取上御座なきに付、相手方へ取掛り申候段、偏に公  
儀へ御恨み申上候に等しく御座候。然れば、以ての外、の  
儀、大學様始め御一門の方々様までも御爲宜しからぬこ  
とにて候ゆゑ、唯一筋に殿様御憤を晴らし奉り候より外  
の心御座なく候。

一段々右申殘し候如く、武士の道を立て候て、御主の仇

を報い申すまでにて、全く公儀へ對し奉り御恨み申上ぐるにて御座なく候。然れども、如何なる思召御座候て、公儀へ御恨み申上げたるも同前とて、我々共の親妻子へ御崇御座候とても、方及び申さず候。萬一左様の事になり候はば、豫て仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、尋常に御覺悟なさるべく候。御早まり候て、御身を我と御過ちなされ候事など、呉れなくあるまじき御事にて候まゝ、必ずく左様に御心得なさるべく候。世の常の女の如くに、彼此と御歎の色も見えさせられ、愚におはしまし候はば、如何ばかり氣の毒にて、心も引かされ候はんを、流石常々の御覺悟ほど御座候て、思召し切りなされ、

我々兄弟  
弟は小野寺幸  
右衛門秀富

九十郎  
姪岡野包秀

却りて健氣なる御勸にも預り候御事、さてく今生の仕合、未來の喜、何事か之に過ぎ申候はんや。天晴我々兄弟は侍の冥利に叶ひ申したる儀と、淺からぬ本望に存じ奉り候。先にての首尾の程、御心に掛けさせらるまじく候。私三十一、幸右衛門二十七、九十郎二十三、何れもく倔強の者共にて候。容易く本望を遂げ、亡君の御心を休め奉り、未來閻魔の金札の土産に供へ申すべきまゝ、御心安く思召し、只々御息災にて、何事も時節を御待ちなさるべく候。御齡もいたう御傾きなされ、幾程もあるまじき御身に、嚙御心細く、便りもあらぬ方に乏しく月日を御凌ぎ遊ばし候はんと存じ奉り候へば、如何程か心憂く候へども、

お千代  
九十郎の妹

其の段力及び申さず候。時に臨み候ては、主命を背き、父母を肩に掛けて、如何なる山の奥、野の末にも隠れ、又主君の爲に父母の命をも失ひ申す事、義と申すものの止み難き例にて候。此等の道理暗からぬそもじ様にておはしまし候へども、筆に任せ申残し候。九十郎母御、お千代へも、能くく仰せ聞かされ候て、必ずく愚に悲しみ申さぬ様に、互に御力を添へさせられ度候。幸なるかな、御法體の御身にて御座候へば、此の後愈、以て佛の御勤のみ候て、憂さも辛さも御紛れましく、未來の事、明暮に御忘なく、世も穩に御座候はば、寺へも節々御參り遊ばされたく、一つには御歩行御養生にもなり申すべく候。乳母にも

諦め候様に能く仰せられ下さるべく候。かしこ。

一四 雪後

北原 白秋

北原白秋  
名は隆吉、福岡縣の人、明治十八年生、文學者

安らかな雪の明りではないか  
ようも晴れた蒼宮あそとらである  
ほう何といふ可愛らしさだ  
あの白い綿帽子を頂いた一つくの墓石は

樋の上の雀よ あの際の閑けさを眺覽  
海近い丘のあの陽だまりに はや  
栗も梅も雪をふかくと冠つたま、

しかも耀く縁から零してゐる

何だかい、知らせでも来さうな気がする

かうした眺の朝は

藍紫に風ぎ沈んだ海　あの遠くに

正しい潮の調律もとのつて来た

安らかだ　まことによう晴れた空だ

ほら山鳩が来た　何の木か揺つてゐる

雀よさあ出て揺つたがよい

微かな雪煙なら却つて親しい

橋南谿

名は春暉、伊勢國の人、醫師、徳川末期の文學者、文化二年（西曆一八五三）歿、年五十三

すべては耀いてゐる

よい歡びにある

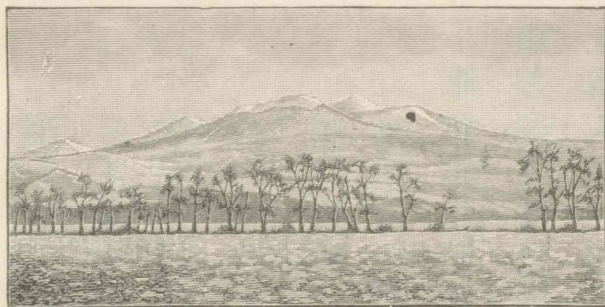
すべては單純だ　雪と光だ――

幼い木魚が鳴りはじめた　（詩と音楽）

一五 雪の山里

橋南谿

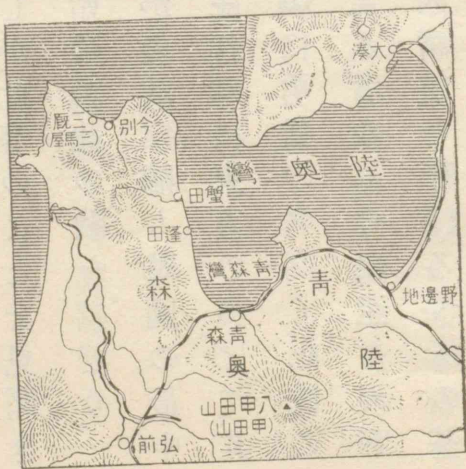
津輕領の青森といふ處の南に當りて、甲田山といへる高山あり。其の峰參差として、指を立てたる如く八つあれば、土俗八つ甲田といふ。叡山・愛宕などの如き山を三つも五つも重ね上げたるが如き高山なり。津輕領の人、勇氣逞し



きもの、または罪を得て姿を隠すものなど、津輕の關所、南部の關所、ともに抜けんとするに、極月より二月、三月の頃までは、此の甲田山の絶頂をさして、雪の上を眞一文字に登り、磁石を立てて、南部地は東南の方と志し、其の甲方角の當る方をさして、眞直に迂り落つることとなりとぞ。つねなみの本道を廻り行く時は、五十里、七十里、或は百里にも餘るところを、纔に一日、二日の間に行着くなり。此の外、津輕の外が濱邊、蟹田、蓬田邊よりも、今別、三馬屋邊へ、雪中には眞直に山を越えて甚

政宗  
伊達氏

だ近く行かるゝことなり。其の餘、一里、二里、五里、七里の程、近き處に、かくの如く雪の上を越えて、近道となる處甚だ多し。つねぐにはみな雜樹、或は熊笹など生茂りて、通ひがたき處なり。此の地數十丈の雪積り、殊に嚴寒の國なれば、雪積るより凍りて甚だ堅く、如何に踏むとも落るといふことなし、南國の雪の様子とは大いに違ひたるものなり。寒中にかの地に遊ばねば、信じ難きことなり。仙臺御先祖、政宗卿の和歌に、



なかくにつづらをりなる道たえて

雪にとりの近きやまざと

といへるも、豫ては解し難く覺えしが、此等のことを見聞き

て、始めて此の歌を感じり。



伊達政宗

を開きしも、只兵馬の力のみと思ひしが、優しき詩歌なども志ありて、誠に文武兼備、豪傑の大將といふべし。集外歌

かの政宗卿も戦國の最中に生れ、殊に東方の夷にて、其の頃に勇猛の名高く、叱咤の威當る者なく、今に至り天下の大諸侯と呼ばるゝ家の基

仙等に出でたる關雪等の和歌は、世人も知る所なり。ひととせ、將軍家の上洛に従ひて、政宗卿も上京の折、禁裏にて、若き人々立集ひ、仙臺侯の國許は人の言葉をかじと聞き侍り。國言葉にて歌よみて見せ給へ。とありし時、政宗卿取敢へず、

東から眞赤な月がずばぬけて

いつこの雲にのたしこむらん

と詠みごとぞ。又、年老いける時の作に、

馬上青年過

世平白髮多

殘軀天所許

不樂是如何

さして文名もなき大將の詩には感すべきことなり。

さればこそ、此の餘風子孫に傳はりて、吉村卿と聞えしは

吉村  
仙臺藩五代

重村  
仙臺藩第七代

殊に歌仙の譽高かりき。今の太守重村卿も和歌の聞えあり。去年、中秋、東武にての作とて、

馬くるま途さりあへぬ世の塵に

くもらで月の高き山の端

と。此等も軒冕の氣風なく、其の人となり思ひやられて、有難くぞ覺ゆる。誠に御先祖政宗卿文武の大將にて、其の餘風今に存せりといふべし。(東遊記)

一六 翻譯

日下、重太郎

安倍仲麻呂が明州で唐人と別れる時に、即興に詠んだ三笠山の月の歌は、大日本史に、「因寫以漢語示之。衆皆感嘆」とある。

日下部重太郎  
岐阜縣の人、  
明治九年生、  
國語研究家、  
東京高等師範  
學校講師。

る。仲麻呂ほどの詩才であるから、之を詩に譯して見せたなら、唐人の感嘆は一層深かつたであらうと思はれる。

白氏文集の燕子樓の第一の詩、

滿窓、明月滿簾、霜

被冷燈殘、拂臥床、

燕子樓中霜月夜

秋來只爲一人長

を、唐物語には、

もろともに見しに光やまさりけん

いまはさびしき秋の夜の月

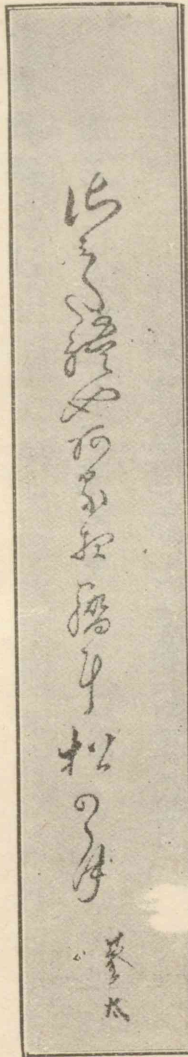
と譯してある。全體、絶句を短歌に直す時は、詞が不足して、十分に原作の意を寫すことが極めて困難である。之に反して、短歌や俳句などを絶句に譯する時は、原作の意を寫す



蓼太  
大島氏、俳人、  
天明七年(西曆  
一八一七)歿、年七十

さみだれやあ  
る夜竊に松の  
月 蓼太

のに詞が十分である。俳諧名家傳に據るに、蓼太の門人が、五月雨やある夜ひそかに松の月の句の意を漢譯して、長崎に来てゐた清國人に見せると、其



蓼太筆蹟

の人大きに感心し、「因賦一絶、寫其意、做響之誚、所不辭也。」とこ  
とわつて、

長夏草堂寂

連宵聽雨眠

何時懸月色

松影落庭前

と譯したさうである。俳句は殊に簡潔で、含蓄の多いもの

であるから、五言絶句に譯するのは宜いが、七言ではだれるやうである。併し、韻文を巧に他國語の韻文に譯するのは、翻譯の中でも最も困難なことであらう。

一七 孝女白菊 (節録)

阿蘇山下荒村、晚  
夕陽欲沈、鳥爭返  
無邊、落木如雨、繁  
隔水、何處、鐘聲遠

此時少女待阿爺

阿蘇の山里あきふけて  
眺さびしきゆふまぐれ  
いづこの寺の鐘ならん  
諸行無常と告げわたる  
折しもひとり門に出て  
父を待つなる少女あり

出門少立空悲嗟  
鬢髮如雲風中亂  
嬌顏春淺美於花

阿爺一朝衝寒起  
蘆花風外渡野水  
曉月影昏野廟西  
遙々去入深山裏  
不知猶爲遊獵不  
數日不歸何處留  
凄烟飛迷殘照外

としは十四の春あさく  
色香ふくめるその様は  
梅か櫻かわかねども  
末頼もしく見えにけり

父は先つ日遊獵に出で  
今なほ音づれなしとかや  
軒に落ち来る木の葉にも  
笥の水のひゞきにも

望斷楓錦柿緋秋  
向夜階前拾落葉  
纖手煮茶搖湘簾  
每聞戸響疑阿爺  
迨至深更未交睫  
闔村人定氣寂寥  
哀雁曳聲度雲霄  
須臾天黑秋風急  
芭蕉葉戰雨瀟瀟  
至此益思阿爺苦  
靜坐不堪聽夜雨

父やかへると疑はれ  
夜なく眠るひまもなし

わきて雨降る小夜中は  
庭の芭蕉の音しげく  
鳴くなる蟲のこゑぐに  
いとゞ哀れを添へにけり  
かゝる寂しき夜半なれば  
ひとり思にたへざらん

綠箠紅笠爲輕裝  
村外歷遍幾林塢

菅の小笠に杖とりて  
出でゆくさまぞ哀れなる

誤入深山墜谷底  
菓實爲食水爲醴  
百万欲登登不得  
起臥洞中纔護體

我あやまちて谷に墜ち  
登らんすべもあらざれば  
木の實を拾ひ水飲みて  
長き月日を送りにき

一朝仰見山千層  
群猿在巔倚枯藤

或日のあした起出でて  
峰のあたりを見上ぐれば  
長くかゝれる藤かづら  
上のましらのなきさけぶ

底事喚我如有意  
攀之巉巖殆得登

なくなる聲の何となく  
心ありげに聞ゆれば  
神のたすけと攀登り  
始めて峰に登り得つ

登來群猿散無跡  
蟬聲如雨滿山背  
誰知義氣亡人間  
却存獸中寔可惜

(井上哲次郎)

嬉しとあたりを見渡せば  
さきのましらは跡もなく  
木立のしげき山かげに  
蟬の聲のみきこゆなり  
浮世のならひといひながら  
浮世のつねといひながら  
人になさけの失せはてて

井上哲次郎  
福岡縣の人、  
安政二年生、  
文學博士、東  
京帝國大學名  
譽教授

落合直文  
誠は秋の家、  
宮城縣の人、  
國文學者、明  
治三十六年没  
年四十三

〔獸に残るぞ哀れなる〕 (落合直文)

一八 扇の的

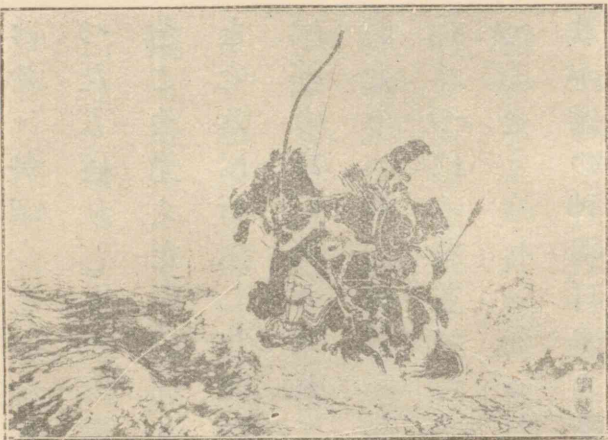
阿波・讚岐に平家に背きて源氏を待ちけるつはものども、  
あそこの嶺こゝの洞より、十四五騎二十騎打連れく、馳來  
る程に、判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。けふは日暮れ  
ぬ、勝負を決すべからずとて、源平互に引退く所に、沖より尋  
常に飾つたる小舟一艘、汀へ向つて漕寄せ、渚より七八段ば  
かりにもなりしかば、舟を横さまになす。あれは如何にと  
見る所に、舟の中より年のよはひ十八九ばかりなる女房の、  
柳の五つぎぬに、紅の袴着たるが、皆ぐれなるの扇の日出い

たるを、舟のせがいに挟み立て、陸へ向ひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれは如何に。」と宣へば、「射よ  
とにこそ候らぬ。たゞし、大將軍の矢おもてに進んでけい  
せいを御覽せられん所を、てだれに狙うて射おとせとの謀  
とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや  
候らん。」と申しければ、判官、御方に射つべき仁は誰かある。」と  
問ひ給へば、「てだれども多う候なかに、下野の國の住人那須  
の太郎資高が子に、與一宗高こそ小兵には候へども、手は利  
いて候。」と申す。判官、證據は如何に。」と宣へば、「さん候。かけ  
鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、  
判官、「さらば與一呼べ。」とて召されけり。

與一その頃は未だ二十ばかりの男なり。褐にあかぢの錦をもつて、おほくびはたそでいろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、うすぎりふに鷹の羽割合はせて矧いだりけるぬための鏑をぞ差添へたる。重籐の弓脇に挟み、冑をば脱いて高紐に懸け、判官の御前に畏る。判官、「いかに與一。あの扇のまん中射て、かたきに見物せさせよかし。」と宣へば、與一、「つかまつつとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き御方の御弓矢のきずにて候べし。一定仕らうずる仁に仰せつけらるべうもや候らん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下

知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、是



よりとうく鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與一重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけん、「さ候はば、外れんをば存じ候はず、御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷立ち、黒き馬の太く逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取直し、手綱かいくつて、汀へ向ひてぞ歩ませける。

御方の兵ども與一が後を遙に見送つて、此の若者一定仕

つべう存じ候。と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢頃少し遠かりければ、海のおもて一段ばかり打入つたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しくて、磯打つ浪も高かりけり。舟は揺りあげ揺りすゑて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べて之を見る。いづれもく晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の權現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇のまん中射させてたばせ給へ。これを射損

ずるほどならば、弓切折り自害して、人に再びおもてを向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、此の矢外させ給ふなど、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなりにけれ。與一鏑を取つてつがひ、よつびいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑はうらひよくほどに長なりして、あやまたず、扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海に入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆ぐれなみの扇の日出いたるが、夕日に輝いて、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られけるを、沖には平家ふなばたを叩いて感じた

り。くがには源氏簞を叩いてどよめきけり。(平家物語)

井上馨

山口縣の人、  
明治の功臣、  
侯爵、大正四  
年歿、年八十

伊藤博文

山口縣の人、  
明治の功臣、  
公爵、明治四  
十二年歿、年  
六十九

兇徒  
安重根

一九 伊藤公を弔ふ

井上馨

明治四十二年十月二十六日、我が友樞密院議長伊藤博文公、韓國兇徒に狙撃せられて、暴に清國吉林省哈爾賓驛に薨ず。嗚呼哀しいかな。予何ぞ多言するに忍びん。然りとはいへども、予君と交る五十餘年、異體同心、生死苦樂を共にし、國歩艱難の秋に始り、太平富貴の月に至り、始終渝ること莫し。自ら謂ふ、交友の誼今古に愧づるなしと。予遂に復一言せずして止むべからず。予君に長ずること六年、君、予の垂死を哭すること二回、予幸に君の交情看護に因つて再生

するを得たり。料らざりき、今日反つて君の葬を送らんとは。嗚呼哀しいかな。

回憶すれば、四十七年前、文久癸亥の仲夏、君、予と偕に發憤して、海軍の術を學ばんと欲し、禁を犯し、潜に泰西に航し、居ること僅に半年餘、馬關、鹿兒島の攘夷を聞き、意を決して急に還り、首として開國を唱へ、故國を危難より脱せしむ。内訌尋いで起り、予は暗夜要撃に遭うて殆ど死し、君は高杉を助けて兵を擧げ、藩論を回復して、我が一大危機を轉過せり。已にして王政復古し、乃ち徵士に擧げられ、版籍奉還の際、君、木戸、大久保、二公を佐けて尤も力あり。維新の績、これよりして破竹の如し。進取の宏謨を翼賛し、維新の大業を成就

高杉  
名は晉作

木戸  
名は孝允  
大久保  
名は利通

す。勅を奉じて憲法を創定し、長く國家の本を固くし、其の他、法律、制度の設、概ね君に俟たざる莫く、洵に組織の才を推す。四度總理大臣となりて勳業の盛を極め、首に韓國統監となりて保護の範を立つ。

君、學漢洋を該ね、識東西に通ず。尤も東洋の平和を以て念と爲し、常に忠節、道義を以て淬礪し、王臣匪躬を以て自ら任ず。故に、國民は仰いて文治の宗と爲し、外人は視て平和の表と爲す。留韓四年、歸來未だ曾て寧處せず。年七十に垂んとして、一歳の行萬哩を期し、節冬寒に向ひて北滿の野に見學す。忠君報國の厚きにあらずんば、孰か能く此の如くならん。豈謂はんや、君の忠節にして、茲の不測に遭ひ、暴

王臣匪躬  
王臣塞々、  
匪躬之故、  
(易經)

に異邦の地に薨ぜんとは。嗚呼哀しいかな。

君の訃、電聞す。皇上震悼、勅して國葬を行はしめ、白叟、黃童、織婦、耕夫も哀悼せざる莫く、乃ち外國帝王、大統領、大臣、紳士に至るまで、親しく弔電を發して我が不幸を言はざる莫し。内外新聞争うて君の才德、勳業を稱贊し、中外著望の盛、振古未だ君の如きはあらざるなり。抑、予は又之に因りて我が國民に望むことあり。誠に君の死を哀しまば、則ち舉國一致、盡忠報國、東洋の平和を維持するに務め、以て君の志を紹ぐべし。古人云ふ、匪以報公、維以報國。死者復生、信我此言。こと。庶幾はくは君をして瞑せしむるを得ん。嗚呼哀しいかな。

古人云ふ  
公雖云亡、其  
志則存、國有  
成法、朝有正  
人、持而守之、  
有一毋隕、匪  
以報公、維以  
報君、天子聖  
明、神母萬年、  
民不告勤、公  
志則然、死者  
復生、信我此  
言、(蘇轍)



二〇 ハルビンの朝嵐

使命は重し身は輕し  
重き使命に輕き身を  
捧げて國に報いんと  
雄々しなつかし伊藤公  
たゞ一心に國のため  
東洋平和の爲とこそ  
老を忘れて老の身を  
胡沙吹く風の滿洲へ

滿洲の野は霜冴えて  
ハルビンKharbin驛の朝まだき  
露國藏相と會見の  
使命果せし折しもや  
不慮の傷手にあなむざん  
眠るが如く息絶えぬ  
「おろか者よ」とあはれみの  
たゞ一言を名殘にて

あゝハルビンの朝あらし  
恨は長ししかはあれ  
公の勳はとこしへに  
平和の塔の礎と

二一 法 難

坪内逍遙

第三幕 第二場 小松原の一部

時雨は今は今全く霽れ上つて、大分高い處に出て居る十一日の宵月は、浮雲に屢々遮られて、あたり時々薄昏になる。此處に、中央に日蓮上人、僧衣に袈裟を掛け、手に數珠を持ち、立身、其の上手に長英坊乘觀坊の二人が、二人とも幾らか手疵を負うたる體にて長英は戒刀を、乘觀は敵から奪つたらしき白刃を提げて居る。

坪内逍遙  
名は雄藏、名  
古屋市の人、  
安政六年生、  
文學者、文學  
博士  
十一月  
文永元年十一  
月  
日蓮  
安房國の人、  
法華宗の開祖  
弘安五年（西  
三政、年六十一

敵

安房國長狹郡  
東條郷の地頭  
東條左衛門尉  
景信の徒百餘  
人をいふ、景  
信は念佛宗信  
者で、日蓮を  
迫害した、日  
蓮は此の日長  
狹郡天津の領  
主工藤左近之  
丞吉隆の邸に  
招待されて行  
く際、景信等  
に要撃された  
のである

鏡忍

日蓮の弟子で  
三十歳以上、  
力十數人を兼  
れた、此の際  
東條勢に殺さ  
れた

乗「勿體ないことを仰せられます。

三人とも上手を見遣つて居るが、長英と乘觀とは上人を諫め止めて居る體である。



蓮 日 僧

長「どうぞ此處は私共にお任せ下

さいまして、どうぞ是非お落ち

遊ばして下さいまし。

日「いや、さうでない。鏡忍を

見殺しにした上にお前等まで

どうして見捨てることが出来

よう？ 初から法華經の爲に奉つた此の命を、正に法華經の爲に失ふといふ、是程の悦が又とあらうか？ 人間

題目  
南無妙法蓮華  
經

は誰しも一度は死ぬものぢやが、斯う云ふ死に方は、一切衆生を生返らせる死に方で、最も望む所ぢや。お前等ももう手向ひは決して無用ぢや。題目を高う唱へ〜して命を終らう。



坪内逍遙

て命を終らう。

乗(泣きながら)鏡忍を始め私共にも、それほどの御憐愍をお掛け下さいまするは、有難いとも忝いとも申上げやうは御座いませんけれど、日本國の只一本の大柱ともお頼まれ遊ばす尊師が、こんな鼠輩の爲に大切なお命をお捨て遊ばすべきぢや御座いません。是非ともお落ち遊ばし

天津  
安房副

て下さいまし。

長「もう此處から天津までは、たかが十一二町で御座います。あそこへお落ち遊ばすまでは、屹度私共が防ぎます。どうぞお落ち下さいまし。」

日「いや〜、其の志は嬉しいが、此の上お前等を見殺しにすることは、どうしても出来ん。お前等と一緒に死なう。」

乗「其のお慈悲のお言葉は、失禮ながら大日本國をお忘れ遊ばしたお言葉で御座います。國家のお爲で御座います。是非ともお落ち下さいまし。(と泣きながら言ふ)

日「いや〜、法難のために死ぬのが、それが即ち國の爲ぢや。」

此の時また関の聲。

長「あゝ！　もうやつて来ました。

第三場　小松原の他の一部

中央のやゝ下手寄に、下手へ向いて日蓮上人、其の前に、土下座して、上人を仰ぎ見て、何事か訴へて居るらしいのは小草である。少し下手の其の脇に長巻が置かれてある。

小草  
東條の老僕左藤次の娘、十七歳、日蓮を信じて居る爲に、東條に縛せられて父子共に納屋に繋がれたが、父が繩を咬切つて小草を自由にして、日蓮の急を工藤に告げさせたのである

日「それは殊勝なことぢや。それほどに思うてくれるのは嬉しい。禮を言ひますぞ。けれども、わしと一緒に行くのは危い。途はよう知つて居る。わしはやつぱり獨りで行く。殊にそんな刃物なんかは持つて居らん方がよい。其處へ捨てて置いて、早う此處を離れなさい。  
小「お上人様、いゝえ、それはいけません。またどんな亂

暴なものが追つかけて来るかも知れませんか、私がお伴します。さ、早く、すぐお出掛けなさいまし。もう少うしいらつしやれば、本街道へ出ます。屹度もう天津の殿様がお迎に來てて御座います。もうすぐで御座います。早くお出かけなさいまし。

此の途端、上手にて東條景信の聲にて、

景「しめた！　髓に日蓮だ！　五郎、續け！

と叫ぶ聲が聞えて来る。小草覺えず長巻を取つて突つ立ち、上手へ廻る。上人これを止めようとする中に、上手より東條景信馬を走らせ一  
出で來り、

景「日蓮坊主、覺悟しろ！

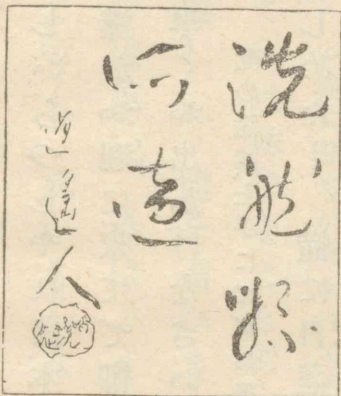
と言ひあへず、太刀を振りかぶつて斬掛けようとする　小草、咄嗟に上

五郎  
景信の家人、天面五郎、この時二十八九歳

人を押隔て、我武者羅に長巻を振廻して景信を遮る。景信苛つて、えゝつ邪魔するな！ どけく！

と、流石に斬下し兼ねて、二三度長巻を撥退けたが、尙うるさく遮るので、大いに怒り、

えゝ面倒な！



内道通筆蹟

洗然順所  
適  
道達人

と、景信はつと馬を駈寄せて斬つて掛る。上人は景信が小草を斬殺したと思ひ、憤激し、今駈寄る景信をはつたと睨み、

とむね打を食らはす。是にて小草は「あつ！と叫んでよろめき、長巻を取落してばつたり倒れる。是より先、上人は小草を止め兼ねて觀念し、傍の松蔭に佇みて、小草の殊勝な働を打守つて居る。小草が「あつ！と叫んで倒れる

日「無道人めが！

と一喝する。と、馬は物におびえたやうに、たぢく〜と後退る。此の内、小草は又むつくと起上つて駈寄り、馬の尻尾を掴んで手強く引く。馬あばれる。景信持餘す。途端に、天面五郎が駈けて来て、此の體を見るや否や、小草の肩先を一刀に斬下げる。是にて小草は尻尾を離して倒れかけたが踏みこたへて、落ちてゐた長巻を拾ふや否や、

小「南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！……」

と高聲に唱へながら、無我夢中の體で五郎に斬つてかゝる。五郎あしらひ兼ねる。此の以前、景信は進んで再び上人に斬つてかゝる。上人は數珠を打揮つて、拂ふともなく、受けるともなく、景信の恰も斬下した一刀を受けると、數珠が忽ち裂れて、太刀先が上人の右の脇に及ぶ。と、覺えず數珠を落して、片膝を地に突く。景信二の太刀を打下さうとす

北浦兄弟  
北浦忠内・忠  
吾兄弟、工藤  
の家人

る。此の途端、向ふ（揚幕）で遠く箭聲が聞えて、一箭飛來て、景信の馬の平首に立つ。是にて馬が逆立となりて、景信は落馬する。と、馬はすぐ上手へ駈去る。此の時、小草は五郎に又一太刀斬られて、長巻を落し、倒れる。五郎は景信の落馬を手を負うたと誤解し、周章てて肩に掛けて、上手へ急ぎ退き去る。と、向ふ（揚幕）より、工藤左近之丞吉隆、題目曼茶羅を結び附けた儘の重簾の弓を脇挟み、騎馬にて北浦兄弟外二人を随へて駈けて出で、松林の方をきつと見て、上人の無事なのを見付け、

吉「おゝ、御安泰だ！……」

と、片手にて天地を拜し、家來を顧みて、

喜べ！ 見る、上人は御無事で入らせらるゝぞ！ 續け者共！

と本舞臺へ來り、急ぎ馬より飛びおりて、上人の前へ主従一同平伏する。

吉隆は上人を三拜し、

吉「未だ親しく御結縁を蒙りませんでした。が、手前儀は天津の工藤吉隆で御座います。御危難と承りまして、取る物も取敢へず駈付けまして御座います。御安泰であらせられます尊顔を拜しまして、此の上の喜は御座いません。手前参りました上は、恐れながら必ず御安心遊ばしませ。日「左近殿で御座るか？ まだ御臥床中と承り居つたのに、早速の御來護、忝う御座る。」

吉（と吉隆は上人の手疵に目を着け）「や！ 上人にはお手疵を負はせられましたか？ それ、忠吾、手おくれにならん中に早く……」

日(制して)「いや、決して御心配なさるな。これやほんのかすり疵ぢや。……わしよりも、弟子の者兩三人、わしを落さうとて、今まだあちらで大勢の敵と苦戦して居る。或はもう落命したかも知れんが、どうか彼等を救うてやつて下さい。」

吉「では、あのお弟子方が！ 心得ました。直様お救ひ申しませう。では、(と北浦兄弟を見返り) 貴様達は上人を御警護申して、先づ兎に角あれなる鎮守の森まで御案内申上げて、早速お手疵のお手當をしる。おれはお弟子方をお救ひ申して、すぐ後から行く。萬一手間取るやうであつたら、先に邸へ御案内申せ。……御免下されませ。(と吉隆馬に乘ら

うとする。)

日(とめて)「いや、其の鎮守への路は心得て居る。御案内には及ばん。それよりも、敵は大勢ぢや。御家來衆は是非悉くお連れなさい。小勢では心許ない。」

吉「お言葉では御座いますが、まだ何處にどう云ふ伏勢が居るやも圖られません。臆病を名代の東條の家の子共なんどが何十人参りませうとも、忽ち追つ返して、お件を致します。……かやう申す間も心がせきます。どうか兎に角お立退き下さいまし。……では、せめて兩人だけ。……それ、忠内、早く御介抱して御案内をせい。源次もお件をしる。」

日「夫程に言はれるなら、一足先に行きませうが、介抱には及ばん。わしの介抱の代りに、あの少女を介抱してやつて下さい。あゝ、不便なことぢや！」

と上人は瞑目して、口中にて題目を唱へる。忠内立寄つて、半死の小草を抱き起し、顔を見て、

忠「お、此の娘は！」

と、又鬨の聲が聞える。此の中、吉隆は手早く曼荼羅を弭はから脱して巻收め、押戴きて懷中し、

吉「さ、早く〜。……御免下さりませ。」

と又馬に跨る。忠内は他の一人と共に片息の小草を介抱して、上人を促して、花道より向ふ（揚幕）へ入る。

と、上手より東條彌八郎を先に、四方木の兵太隨ひ、新子の兵の心にて、勢

彌八郎  
名は景房、東條の家人、二十五六歳  
四方木の兵太  
東條の家人、十五六歳

ひ込んで駈付ける。

彌「工藤殿に物申すぞ。各宗を讒謗し、鎌倉殿の政道を非議し、魔を使つて世を亂す狂坊主の日蓮を庇ひ立てめさるからは、お手前は、明白に鎌倉殿の罪人で御座る。容赦は致さんぞ。覺悟召され！」

吉「さういふお手前等こそ、悪宗門の肩を持つて聖僧を讒誣し、何罪もなき良民を無法に殺戮して悔ゆることなき殘忍、無慈悲の無道人ぢや。天にかはつて吉隆が誅戮する。覺悟なさい。」

と弓を投捨てて太刀を抜く。

彌「何を！」



東條の兵等一齊に競ひかゝる。暫くごつちやの立廻り。と、東條方叶はず、上手へ逃げる。吉隆主従それを追討ち、共に上手へ入る。又舞臺を薄暗くする。其の薄暗い中で、遠く又鬨の聲、其の聲の消えて仕舞ふ頃段々明るくなる。

#### 第四場 小松原附近の鎮守の杜

中央に小さき神社。其の後にも左右にも、年を経た樹木並び立ち、よき處に鳥居。上手の一隅に御手洗みたらしの古き泉。群樹の一端より間近く海が透けて見える。此處に、中央に上人切株に腰掛け、忠内は御手洗を酌んで來て、他の一人と共に上人の脇の疵を洗ひ、綱帶を參らせなどして居る。下手には小草の死骸が横たへてある。

忠「嗚お痛み遊ばすて御座いませう。

日「いや、もう痛みは薄らいだ。お大儀、お大儀……左近

殿のことが心懸りぢや。わしは此處に斯うして居れば大丈夫ぢや。往つて見て來て下さい。  
忠「畏りました。

と、忠内は他の一人を残して置いて、急いで向ふ(揚幕)へ入る。と、上人はじつと小草の死骸を見遣つて、

日「あゝ殊勝なのはあの少女ぢや。(と徐かに立寄つて、暫く合掌默禱して)良薬は、其の良薬たることを絶えて知らざらん者と雖も、之を服すれば病癒ゆる。此の一少女、生前は無智蒙昧、其の命を終る數刻の前までは、未だ曾て妙經の一語をだに分解せず、況や其の甚深の義理をや。然るに、一旦にして妙法の徳に感じ、口に南無妙法蓮華經を唱へ續けて、

勇猛壯烈の武士の如くに、妙法の爲に命を獻じ畢んぬること斯くの如し。其の志は古の聖者にも劣るべからず。我不愛身命、但惜無上道。南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！

此の時、向ふより、花道を経て、痛手を負ひて、刀を杖によるめきつゝ歩む。吉隆を左右より介抱して、忠吾忠内、又其の後よりは、吉隆の家來二人に介抱されて、同じく手負の乗觀、長英出で來り、やうくにして本舞臺へ來ると、皆々宜しく上人の前に平伏して會釋する。中にも、吉隆は上人の顔を見上げると同時に、嬉しげに打笑んだが、氣が弛んだらしく、がつくりとして瞑目し、もう物は言はれぬらしく、たゞ合掌するのみである。上人は痛ましげに其の傍に立寄りて、靜に、

日「吉隆殿！吉隆殿！」

と二度呼ぶと、吉隆は微に目を開いたが、又忽ち目を瞑ぎて、再び合掌する。上人も暫く無言で落涙の體、皆々も顔を擧げ得ず泣いて居る。獻<sup>トク</sup>の聲も聞える。上人はこゝんで吉隆の手を取つて、耳元に口を寄せ

日「無上妙法の爲に、一身を獻ぜられた大功德、天晴のお手柄で御座つたぞ。姿は俗の儘ぢやが、見事に不惜身命の大行者たる務をお果しなされた。今日只今日、蓮が上人號を參らせませすぞ。今日からは日玉上人とお名乗りなさい。……吉隆殿！吉隆殿！」

是にて吉隆又微に目を開き、につこり笑み、又目を塞ぐ。其の間少しも合掌の姿勢を崩さない。

日蓮も或は程なく參るでもあらう。が、若し御手前の方

が先であつたら、あの世へ往つて、立派に梵天帝釋四大天王・閻魔大王等に名を名乗つてお聞かせなさい。日本第一の行者日蓮坊に随つて、法難に身を捨てたとお名乗りなさい。必ず親切に優待してくれらるゝて御座らうぞ。……如來の現在にすら怨嫉多し、況や滅度の後をや。身輕法重、殺身弘法。南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！と唱へ續ける。吉隆落入る。皆々落涙しつゝ、同じく合掌して同音に、皆「南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！南無妙法蓮華經！」此の題目の續く間に、靜に幕。(法難)

二二 日蓮上人

高山樗牛

高山樗牛  
名は林次郎、  
山形縣の人、  
文學博士、明  
治三十五年歿  
年三十二

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて、類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、此の大願の前には、如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經の爲に此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり。と喝破し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闇地獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむる

ものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に、四條金吾頼基とて、江馬遠江守光時の老臣

ありき。此の人武士の身分な

がら夙に妙法に歸依して、上人

の門下に列り、不惜身命の覺悟

を以て、上人とともにろく

の迫害を被れり。上人龍口に

て斬られんとせし時は、路上に



高山牛

龍口  
相模國鎌倉郡  
腰越村にある

馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文には、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、殿にして若し死後

地獄に墮せられなば、日蓮もまた共に地獄に墮すべし。た

とひ、釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふ

とも、振返つて必ず殿とともに地獄に墮すべし。との意を述

べられたり。其の恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。

天下の威武を敵として、一步も退讓することなき大丈夫の

上人にして、他面に於て此の兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべき

を覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も

明に現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六

十六箇國島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處な

くして、身延山の深谷に隠るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮

身延山

甲斐國南巨摩  
郡にある、今  
久遠寺のある  
處

房州  
安房國小湊村  
が日蓮の誕生  
地である

池上  
本門寺のある  
處

波木井  
甲斐國の人、  
南部實長のこ  
と、身延山の  
地は此の人が  
日蓮に贈つた  
のである

山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀登りて、遂に上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に之と比較し得べき美談あるか。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬を色々いたはしく思ふ旨を書かれ、をはりに、知らぬ舍人を附け候うては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、此の舍人を附け置き候はんと存じ候。と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹

の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ、偉人と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。此の情愛なくば、かの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲即ち刺を織る絲なるにあらずや。(釋牛全集)

二三 世の中

世の中を  
吉田兼好の作

末つひに  
伴蒿蹊の作

雨あられ  
作者知らず

世の中を渡りくらべて今ぞ知る

阿波の鳴門に波風もなし

末つひに海となるべき山水も

しばし木の葉の下くゞるなり

雨あられ雪や氷と隔つれど

落つれば同じ谷川の水

中編

一言志録抄

佐藤一齋

其一

凡作事、須要有事天之心。不要有示人之念。立志之功、以知恥爲要。

盡性分之本然、務職分之當然。如此而已矣。有心求

名固非。有心避名亦非。

眞有大志者、克勤小物。眞有遠慮者、不忽細事。一藝

之士皆可語。

佐藤一齋  
名は坦、伊勢  
國の人、徳川  
末期の儒者、  
安政六年（三  
元）歿、年八  
十八

登山嶽，涉川海，走數十百里，有時乎露宿不寐，有時乎饑不食，寒不衣。此是多少實際學問。若夫徒爾明窓淨几，焚香讀書，恐少得力處。

辭爵祿，易不爲小利動難。

凡與人語，須教渠說其所長，於我有益。

凡欲諫人，有一團誠意，溢於言而已。苟挾一忿疾之心，諫決不入。(言志錄)

其二

以春風接人，以秋霜自肅。

克己工夫，在一呼吸間。

終年奔走於都城内，不自知天地之爲大。時可泛川海，時可登邱嶽，時可行蒼莽之野。此亦心學也。

踟躕於城市紛鬧之衢，不知春秋之偉觀。逍遙於田園間曠之地，實見化工之無窮。余嘗有句曰：「城市春秋淺，田園造化忙。」自謂非瞞人語。

人涉世，如行旅。然途有險夷，日有晴雨。畢竟不得避，只宜隨處隨時相緩急。勿欲速以取災，勿猶豫以後期。是處旅之道，即涉世之道也。

有好爲大言者，其人必小量。有好爲壯語者，其人必怯懦。言語不大不壯，中有含蓄者，多是識量弘恢人。

物。(言志後錄)

其三

濁水亦水也。一澄則爲清水。客氣亦氣也。一轉則爲正氣。逐客工夫只是克己。只是復禮。

知彼知己百戰百勝。知彼似難而易。知己似易而難。我言語吾耳可自聽。我舉動吾目可自視。視聽既不愧於心。則人亦必服。

慎獨工夫。當如身在稠人廣坐中一般。應酬工夫。當如間居獨處時一般。

不欺人者。人亦不敢欺。欺人者。卻爲人所欺。

遠怨之道。一箇恕字。息爭之道。一箇讓字。

人得意時。輒饒言語。逆意時。即動聲色。皆見養之不足。

勿賣恩。賣恩卻惹怨。勿干譽。干譽輒招毀。

石重故不動。根深故不拔。人當知自重。(言志晚錄)

其四

凡爲學之初。必立欲爲大人之志。然後書可讀也。不然。徒貪聞見而已。則或恐長傲飾非。所謂假寇兵。資盜糧也。可虞。

無不可窮之理。無不可應之變。



寒暑榮枯、天地之呼吸也。苦樂榮辱、人生之呼吸也。即世界之所以為活物、不自欺、謂之事天。天之將雨也、穴蟻知之。野之將霜也、草蟲知之。人心之有感應、亦與之同一理。人心之感應、磁石之吸鐵也。勿謂人情難測。我情即是人情。我自感而後、人感之。無筆而畫者、形影也。無脚而走者、感應也。感應之妙、通於異類。況人乎。

我施恩於人、可忘。我受惠於人、不可忘。人有同於我者、可與交。而其受益、不太多。有不同於我者、亦可與交。而其益、則匪尠。他山之石、可以磨玉。即是。眞勇如怯、眞智如愚、眞才如鈍、眞巧如拙。有實之名、不必謝。我之賓也。無義之利、不苟受。我之讎也。（言志叢錄）

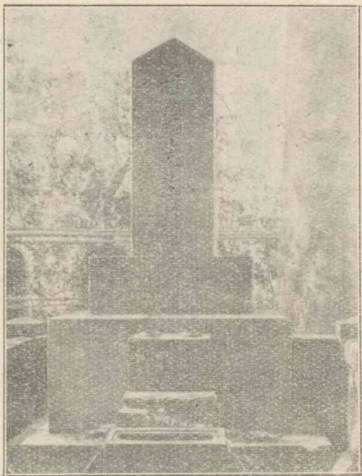
二 甘藷先生

原 善

青木敦書、稱文藏、號昆陽。武藏人。嘗嘆曰、凡有罪非

原善 字は公道、號は念齋、徳川幕府の士、文章家、文化三年（四六）歿、年四十  
青木敦書 徳川幕府の儒臣、明和六年（四九）歿、年七十二

甘藷先生墓



甘藷先生之墓

死刑者、遠放之島嶼、要在使其終天年耳。然諸島少五穀、常以海產果實給食。是以、往々不能免餓死。豈不亦痛哉。即雖種藝之地、遇歲歉、則民不能無菜色。意者、百穀之外、可以當穀者、莫如蕃薯也。乃陳官、求種子于薩摩、試種之。官藥苑中、則極蕃衍。於是、以國字著蕃薯考一卷、而演其培植之法。官鑲版、併種子、行下諸州。未數年、無處不種。至今上下便之。雖歲不登、民不遘餓者、實昆陽之

官藥苑  
今の小石川植  
物園

惠及無窮矣。題其墓門之碑曰：甘藷先生墓、有以哉。

### 三 單騎遠征

村上珍休

信州山巒峻秀、自古多出魁偉特絕之士。若木曾義仲之雄武、太宰春臺之古學、佐久間象山、其尤著者。陸軍步兵中佐福島安正、信州松本人、亦以遠征著稱。君聰慧、八歲讀書、講武、已有四方之志。明治初、從藩主來東京、修英學、于開成所。家貧、乏資、刻苦不止、業益進。六年、出仕陸軍省、肆力地理學。傍修外國語。以官命、航米、清、朝鮮、印度、考察形勢。二十年、

木曾義仲  
源氏、壽永三  
年（八四四）歿、  
年三十一  
太宰春臺  
名は純、儒者  
延享四年（一四  
〇七）歿、年六  
十八  
佐久間象山  
名は啓、開國  
家、文久四年  
（一五四）歿、年  
五十四

俄國

萬里之遠征  
健康如此



以陸軍步兵少佐赴獨逸公使館任滿將歸命巡視俄清國界君躍然曰可以成吾宿志矣二十五年二月鞭凱旋發獨都凱旋者其愛馬也達俄都聖彼堡抵莫斯科又行二十里凱旋以日行冰雪中斃更購名馬烏拉於莫斯科六月抵加森嚴寒頓變酷暑於是晝寐夜行約五百里道路險難東踰烏拉山是為歐亞界遂入西比利亞西部會惡疫流行每見病者投所携藥皆額手謝恩九

福島安正筆蹟

李紳  
字は公垂、  
唐代の詩人

月抵亞爾泰山購良馬名亞爾泰登亞爾泰山窮絕頂是為俄清界以佩刀刻姓名於巨巖笑曰誰謂亞爾泰山高吾昂於亞爾泰幾尺入外蒙古寒氣益甚溪水凍合乾羊肉外無一穀菜病胃無醫藥遂養病穹廬夜焚乾馬糞取煖涉旬病瘥入西比利亞東部

四 憫農

李紳

鋤禾日當午  
汗滴禾下土  
誰知盤中殮  
粒粒皆辛苦

五 蠶婦

逸名

昨日到城郭  
歸來淚滿巾  
遍身綺羅者  
不是養蠶人

六 故事四則

螢雪之功 晉車胤幼恭勤博覽貧不常得油夏  
月以練囊盛數十螢火照書讀之以夜繼日後官至  
尚書郎

晉孫康少清介交遊不雜家貧無油嘗映雪讀書後  
官至御史大夫 (晉書)

杞憂 杞國有人憂天地崩墜身亡所寄廢寢食  
者又有憂彼之所憂者因往曉之其人舍然大喜曉  
之者亦舍然大喜 (列子)

守株 宋人有耕田者田中有株兔走觸株折頸  
而死因釋其耒而守株冀復得兔兔不可復得而身  
爲宋國笑 (韓非子)

矛盾 楚人有鬻盾與矛者譽之曰吾盾之堅莫  
能陷也又譽其矛曰吾矛之利於物無不陷也或曰  
以子之矛陷子之盾如何其人弗能應也 (尸子)

七 刎頸之交

趙王歸、以藺相如爲上卿。在廉頗右。頗曰、我爲趙將、有攻城野戰功。相如素賤人。徒以口舌居我上。吾羞爲之下。我見相如、必辱之。相如聞之、每朝常稱病、不欲與爭列。出望見、輒引車避匿。其舍人皆以爲恥。相如曰、夫以秦之威、相如廷叱之、辱其群臣。相如雖獨畏廉將軍哉。顧念強秦不敢加兵於趙者、徒以吾兩人在也。今兩虎共鬪、其勢不俱生。吾所以爲此者、先國家之急、而後私讐也。頗聞之、肉袒負荊、詣門謝罪。遂爲刎頸之交。(十八史略)

八 了伯聽平語

大槻 磐 溪

大槻磐溪  
名は清崇、仙臺の人、儒者、明治十一年歿、年七十八

佐野城主天德寺了伯、屬豐臣氏、驍名夙顯。嘗招瞽師、善琵琶者某、演平語。瞽師爲唱二曲。一係佐々木高綱事、一係那須宗高事。了伯每聽一曲、嗚咽歔歔而不可已。他日、從容問左右曰、昨聽平語若何。皆曰、甚可樂也。但所演皆係赫赫功名之事。而君獨泣不已。何也。了伯聞之、仰天大息曰、吾今而知汝等不足爲我用也。顧高綱之辭鎌倉公、乞其所愛名馬、而約先登於不可必之前。其心固無生還之理矣。宗高立馬於兩軍屬目之中、而射扇眼乎海波數百步之外。不

幸一發不中、唯有自刎以投於海耳。吾推究二子心事至此、則感慨悲壯、不自覺涕淚之交乎睫也。今日弓箭之士、果能以二子之心為心、則何戰不勝、何功不成。汝等乃曰、見其可樂、不見其可悲。吾是以知其無能為也。

寧靜子曰、古人云、以活眼讀活書。天德寺氏之聽平語、可移以為讀史之法焉。(近古史談)

九 佐々木高綱

賴山陽

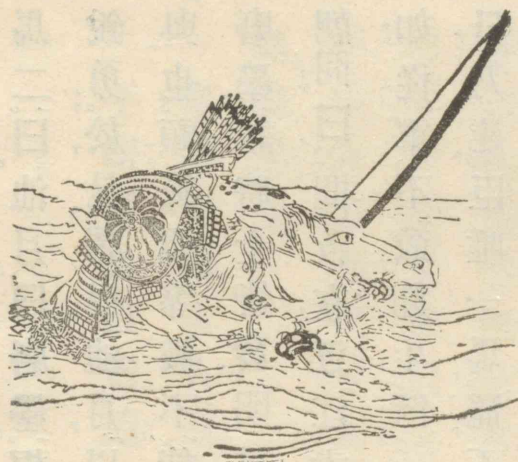
元曆元年正月、賴朝檄八州將士、西討義仲。無幾何、

賴山陽  
名は眞、安藝  
國の人、儒者

天保三年(一  
六三)癸、年五  
十三  
元曆元年  
壽永三年に當  
る

徵兵聚者六萬。乃盡委之於範賴義經。因令曰、木曾阻我兵、必於宇治河皆具善馬、可以騎渡。賴朝有駿馬二。曰池月、曰磨墨。梶原景時有寵。其子景季年少銳勇。於是請得池月、以先登。賴朝曰、乞焉者多、吾不與也。顧範賴等戰不能克、吾且親往。此吾乘也。乃賜磨墨。諸將士皆發。明日、佐々木高綱、自近江來謁。賴朝問曰、聞汝在近江。盍直從軍入京乎。高綱對曰、臣如從軍、不敢期生。欲一見君訣別、且奉指揮也。馳三日乃達。臣唯一馬、罷不可用。故後期在此。賴朝喜、因謂之曰、汝能為我先登於宇治乎。曰、能。臣居河上、識

浮島原  
駿河國



佐々木高綱

其淺深也。於是遂出池月賜之。高綱感喜謝曰、君聞高綱未戰而死、則不能先登也。聞未死而戰、則先登者高綱也。拜舞而出。賴朝呼返戒之曰、景季等乞焉而不與。汝記之。對曰、諾。時大軍陣于浮島原。景季視群馬、無過磨墨者。牽而上高丘、誇示於衆。已而有嘶聲。畠山重忠曰、池月聲也。何以至此。已而高綱僕牽池月至、過丘下。景季問

四郎  
高綱  
公  
賴朝

曰、誰乘。僕對曰、佐々木氏之乘。景季大慍曰、不圖公之視彼踰我。我寧與彼死、使公喪二良。即控刀要路而待。高綱望見之、謂其騎曰、彼非梶原邪。公之囑我、殆爲是也。漸近。景季呼曰、四郎久闊。彼乘公所賜乎。高綱晒曰、否。吾患無善馬、欲就公厩借之。聞磨墨已賜於子矣。池月不得命矣。子且然。況於高綱乎。然君事方急、不遑顧慮。遂誘厩人竊之矣。後有責問、子幸救解之。景季色解、笑曰、悔我不竊也。乃與俱西。(日本史)

一〇 那須宗高

賴山陽

日既晡。敵以一舟載美姬、插扇子于竿、植之舳、去陸五十步、麾而請射。義經曰、誰命中之者。衆薦下野人那須宗高。義經召而命之。宗高騎而獨出。兩軍注視。宗高一發、斷扇轂而墮。兩軍大呼。(日本外史)

二 詠史五首

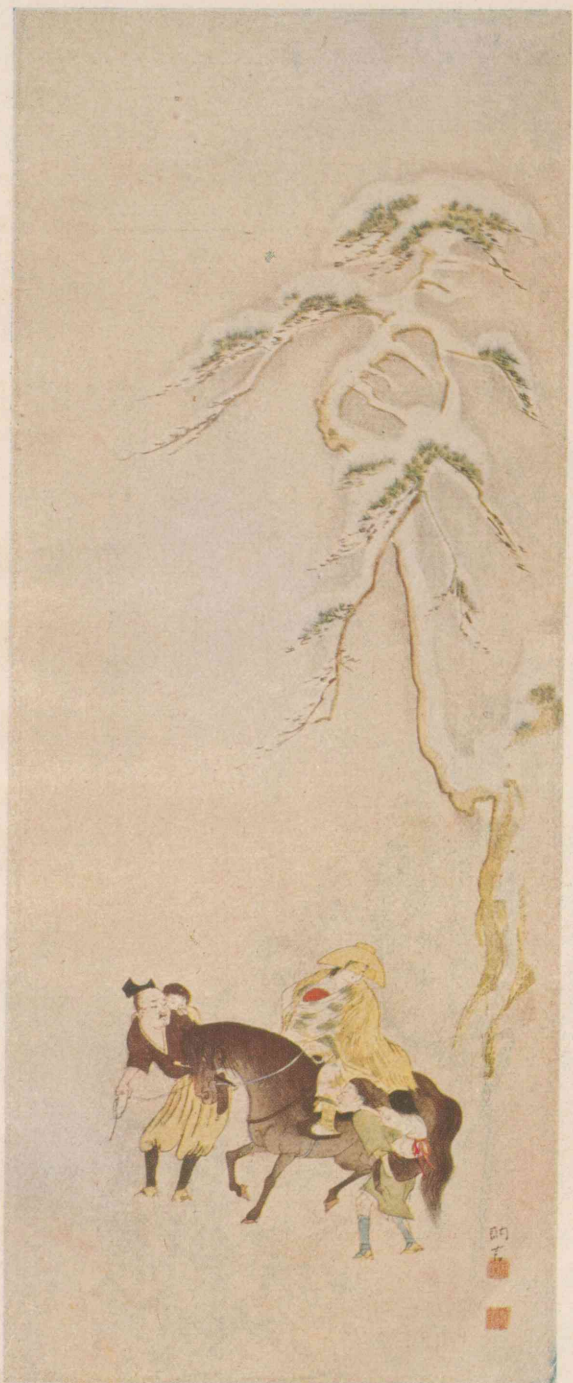
一 八幡公

賴山陽

結髮從軍弓箭雄  
八洲草木識威風  
白旗不動兵營靜  
立馬邊城看亂鴻



雪中の常磐（田中訥言筆）



梁川星巖

名は孟緯、美濃國の人、詩人、安政五年（五二）歿、年七十

二 題常磐抱孤圖

雪灑笠檐風捲袂  
他年鐵枴峰頭險

梁川星巖

呱呱覓乳若爲情  
叱咤三軍是此聲

三 太田道灌借蓑圖

孤鞍衝雨叩茅茨  
少女爲遺花一枝  
少女不言花不語  
英雄心緒亂如絲

大槻磐溪

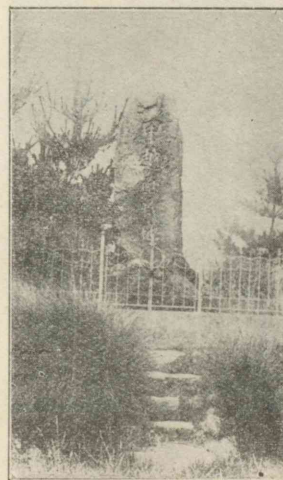


太田道灌

四 題不識庵擊機山圖

賴山陽

鞭聲肅肅夜過河  
曉見千兵擁大牙  
遺恨十年磨一劍  
流星光底逸長蛇



碑之場戰古越甲

五 題兒島高德書櫻樹圖

齋藤監物

踏破千山萬嶽煙  
單蓑直入虎狼窟  
報國丹心嗟獨力  
數行紅淚兩行字

鸞輿今日到何邊  
一匕深探鮫鱔淵  
回天事業奈空拳  
付與櫻花奏九天

齋藤監物

名は一徳、水戸の志士、萬延元年(五三〇)歿、年三十九

後編

一 現代の社會

澁澤榮一

社會を誘導して善良な風に移らせることは、一にそこに住む人々の人格に依らなければ出来ないことである。さて、斯うして風紀が正しく而も富裕になれば、これ既に善良な理想的社會といふことが出来るが、これに反して、風紀は紊亂し、且貧賤目も當てられぬやうになれば、これ勿論惡社會と言はねばならぬ。そして、人は果して如何なる社會を要望するかと言ふと、無論善良な社會を組織したいとの希望を有するに相違ない。然らば、理想的社會は如何にして需めるべきであるか。これ余がこゝに説かうとする眼目である。

現今の我が社會に對する世人の評論には二種類ある。それは、極端に悲觀するものと、さうでないものとである。余の如きは、いづれかといふと、寧ろ悲觀しない方である。これを明治以前の社會に比較すると、大いに進歩

澁澤榮一

埼玉縣の人、青淵と號する、實業家、子爵

一益友ヲ近ケ損友ヲ遠ケ荷モ已ニ器フ者ヲ友トスベカラズ  
 一人ニ接スルニハ必ズ敬意ヲ主トスベシ宴樂遊興ノ時ト雖モ敬禮ヲ失フコトアルベカラズ  
 一凡ソ一事ヲ爲シニ物ニ接スルニモ必ズ満身ノ精神ヲ以テスベシ瑣事タリトモ之ヲ苟且ニ付スベカラズ  
 一富貴ニ驕ルベカラズ貧賤ヲ患フベカラズ唯知識ヲ磨キ德行ヲ修メテ眞成ノ幸福ヲ期スベシ

向上して來たと思つて居る。然るに、かの悲觀論者は、昔は上下貴賤の別が嚴然として存してゐたが、今日は殆どそれらの區別がなくなつて、社會の禮節が紊亂した。とか、昔の人は忠信、孝悌の道より外には何等の思想も抱かなかつたが、今日の思想界には、餘り感心されない危険な考を抱くものが出來

一益友ヲ近ケ損友ヲ遠ケ荷モ已ニ器フ者ヲ友トスベカラズ  
 一人ニ接スルニハ必ズ敬意ヲ主トスベシ宴樂遊興ノ時ト雖モ敬禮ヲ失フコトアルベカラズ  
 一凡ソ一事ヲ爲シニ物ニ接スルニモ必ズ満身ノ精神ヲ以テスベシ瑣事タリトモ之ヲ苟且ニ付スベカラズ  
 一富貴ニ驕ルベカラズ貧賤ヲ患フベカラズ唯知識ヲ磨キ德行ヲ修メテ眞成ノ幸福ヲ期スベシ

蹟筆一榮澤滄

た。とか、或は、往時の學生は質樸で剛健な氣象に富んで居つたが、今の學生は徒に柔弱淫靡の風に傾いて來た。とか、或は、一般に人間が利に走つて、人情が薄らいだ。とか、或は、俄に富を作つたものが倨傲不遜で、突飛な言論を吐いたり、亂暴な行動に出たりする。とか言つて、頻りに現代社會の風潮を悲觀して

居る。併しながら、如何なる時代に於ても、社會の全局面に亙つて完全無缺を期することは困難である。況や文明の過渡期たる大正の現代に於て、社會の長所はこれを差措いて、無暗とその短所ばかり拾うたならば、恐らく弊害や缺點は單に上掲の事項ぐらゐで盡きはすまい。斯くの如き悲觀説を立てると、天下の事は何一つとして悲觀の種でないものはないことになる。そんな片手落の議論をしないで、宜しく公平な見識を持ち、社會の光明面と暗黒面とを比較して、其の孰れが著明であるかを商量するのが當然であらう。余は此の立場から觀て、現在の社會は明に向上進歩の途上にあるとして樂觀するのである。

先づ、社會の最大資本たる富の程度が一般に高まつて居る。昔日の富といふと、土地家屋のやうな物に限られて、其の範圍も分量も甚だ狭く且小さかつた。然るに、今日では有價證券といふ調法な物が出來た。又、株式などは富を進める最高手段と言つてもよく、公債なども亦同様である。海外貿易なども亦殆ど昔日に存しなかつた富の増殖法である。富以外に於ても、

海陸共に交通機關が具備したことや、教育の普及したことなどは、殊に著しい事柄ではあるまいか。

就中、教育に於ては、維新以前の狀態に徴すると、一般社會の事に通曉して居る者は、百人中に一人あるかなしであつて、社會の人の多くは無學文盲で、偶、文字のある者でも、寺小屋へ行つて少しく習つたといふに過ぎなかつたから、無筆の人は殆ど社會の到る處に充滿してゐた。然るに、今日はどうであらう、全く無筆の人は殆ど皆無になり、日本全國津々浦々に至るまで、教育は善く行届いて居る。例へば、三井岩崎の子息でも、其の隣家の八百屋の子息に比べて、教育がさまで違はぬことになつた。女子教育は別けても發達したもので、昔の女子は、富貴の家では、深窓の佳人などと稱して、なるべく社會へは出ない方であつたが、今日では、女子にもそれ相應に社會的の仕事が出来、教師とか醫師とか事務員とかいふやうに、男子と同様に働くやうになつた。是も偏に教育普及の賜ではないか。其の他、一般社會の交際なども、教育のある人々の交際であるから、昔に比して品格もよくなり禮儀も正し

三井岩崎  
我が國の富豪  
三井家及び岩  
崎家を指す

くなつた。尤も稍厚顔になつたといふ傾はあるらしいが、概して弊害よりは利益の方が多い。社會は實に斯くの如く駸々として進歩して居るのに、此の事實に對して悲觀論を唱へる人々の氣が知れない。

さりながら、余は絶對に現代社會に満足する者ではない。まだ大いに足りない點のあるのを遺憾とする。足りない點とは何か。それは仁義道德の觀念が他の進歩に比して大いに遜色のあることである。要するに、眞正の富といふものは、強い信念と厚い徳義とに依らなければ、永遠に之を維持することが出来ない。勿論富も地位も、其の人の活動如何に依つては、一時的には之を得られるけれども、永久に持續しようとするには、強い信念と厚い徳義とを根本思想として置かなければ、其の間に種々の物我が起つて邪路に入り易いから、永遠に強固に保持することが出来なくなる。余が遺憾とする所は一に此處に存する。故に、現今に於ける愛國者の務は何であるかといふに、専ら社會に仁義道德の觀念を鼓吹し、爲政者と被治者とを論せず、社會の上下を一齊に眞摯敦厚の氣風に引直すやうにすることが緊要で

ある。社會のことは、仁義道德を外にして之が救済を企てても、それは謂れないことであつて、終に晝餅に歸せざるを得ない。

更に、一の注意を要すべきことは、社會に於ける貧富の隔絶である。此の貧富隔絶の結果は、經世家が最も憂慮すべき悪い意義の社會主義を勃發させることになるのである。如何となれば、社會の全部が、貧民ばかりで貧々相依るとか、或はそれと反對に、富豪ばかりで富々相交るならば、人々の思想は平均されるから、別に不平も起らないのであるが、社會が進歩するに従ひ、此の間の懸隔が次第に甚しくなつて行くことは、歐米諸國の先例が之を物語つて居る。即ち社會が進歩するといふ利益の他の一面に於ては、貧富懸隔といふ禍害が生じて來るのである。此の事實は文明國に於て等しく味ひつゝある苦楚で、之を甘く調和して行く爲に、社會政策が唱道されて居る。併しながら、余は斯くの如き問題も亦前述の眞摯敦厚の風に依つて之を防ぐことが出來ると思ふ。富豪は自ら富豪たるの本身を守つて其の責任を盡し、貧者も貧者としての本身を守つて努力勉勵し、上下の間に相憐相讓の

風があるならば、此の間に一波の動くことなく、社會は極めて靜平であるであらう。然らば、眞摯敦厚の風は何を以て之を指導すべきかといふに、仁義道德孝悌忠信の道を行ふより外に策はない。故に、憂國の士は宜しく此の明瞭な救済策に意を用ひ、大いに社會をして眞摯敦厚の風に移らせなければならぬのである。(青淵百話)

### 二 信 仰

釋 宗 演

釋宗演

俗名一瀬常吉  
福井縣の人、  
臨濟宗圓覺寺  
派管長、大正  
八年歿、年六  
十一

ゲーテ  
(1749—1832)  
水の流と  
近松の「冥途  
の飛脚」など  
にある語

ドイツの詩人ゲーテは、信仰はあらゆる知識の極度である、といつた。知識が行詰つた時、眼前に横たはつて居る黒金の垣を突破して、眞理の寶藏に進み入ることの出來る智慧と力とを與へてくれるものは信仰である。信仰はこれを譬へれば舟や筏のやうなものである。人間の生涯は、水の流と人の身の……と諺の文句にあるやうに、たゞこれ生死の流である。此の生死の流を渡る舟や筏が即ち信仰である。舟や筏がなければ江海を渡ることが出來ないやうに、信仰がなければ人生の海を渡りおほせることが出來

ない。

普通に信仰といへば、單に慰安氣休めになるもの位にしか解されてゐないが、信仰は單に慰安氣休めになるばかりでなく、人を活動させる大原動力となるものである。信仰は人に勇氣を與へる、活氣を與へる、獅子奮迅せんじゆんの勢を振ひ起させるものである。信仰を得た人は、恰も飢ゑた人が食を得たやうなものである。真理の大寶藏に向つ



宗 釋

て向上の一路を蒸進じやうしんしようとする青年男女に、若し信仰がなかつたならば、所詮途中の障礙物を突破することは出来ない。佛教では、信仰を稱して一に大覺といひ、大覺を得た人を覺者とも佛者とも稱する。大覺とは、平易にいへば「さとり」である。自覺覺他、覺行圓滿の境地に至つたのが覺者即ち佛陀で、佛陀になつた程の人は、其の信仰によつて真理を徹見する力を有して居るから、決して知識の行詰ることはないもので

大學之道、在  
明明徳、在親  
民、在止、至善、  
釋洪岳教書

村上專精

兵庫縣の人、  
嘉永四年生、  
佛教學者、文  
學博士、東京  
帝國大學名譽  
教授

親鸞上人

日野氏、京都  
の人、鎌倉時  
代の高僧、一  
向宗の開祖、  
本願寺の開基  
證號は眞大  
師、弘長二年  
(一三三三)歿、年  
九十

ある。向上の一路を蒸進しようとする青年男女に信仰の必要な所以は茲にある。かのゲーテの言のやうに、信仰は如何にも知識の極度に相違はないが、それと同時に、又知識の端緒でもある。絶對や空想を排斥して、實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、其の基礎となるものは信仰である。信仰がなければ辨異統同を行ふことは出来ない、歸納も演繹も批判も出来ない。富貴も淫することが出来ず、貧賤も移すことの出来ない道徳的大勇猛心も、亦信仰によらねば之を得ることは出来ないものである。(叩けよ開かれん)

大覺くをせむゆゆは  
親鸞上人の遺言

釋宗演筆蹟

三 源信僧都

村上專精

親鸞上人は法然上人のお弟子であります。法然上人が阿彌陀の信仰を

法然上人  
 漆氏、源空といふ、美作國の人、鎌倉時代の高僧、淨土專念宗の開祖、諡號は圓光大師、建曆二年(一一七二)歿年八十

源信

卜部氏、大和國の人、平安朝中世の高僧、寛仁元年(一一三二)歿、年七十六

比叡山  
 延曆寺



然 法 僧

得て極樂往生といふことを唱へ出したのは、源信僧都の『往生要集』に啓發された所が多かつたからであります。かういふ關係を辿つて見ると、親鸞の偉大さの源流として、源信僧都といふものを認めなくてはならなくなつて來ます。

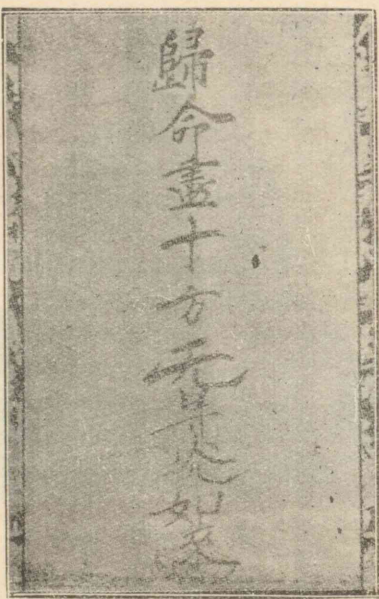
源信僧都の生立は、傳説ですから明瞭には解りませんが、父は朝廷に事へてゐた人で、源信僧都がまだ三歳の時病歿して了ひました。僧都の母は夫に死別すると共に京の住居を引拂ひ、源信を連れて大和國に移つて、住居

をしてゐました。

源信が五歳の時、比叡山の巡回僧が大和國へ廻つて來ました。源信は友達と一緒に河の畔で遊んでゐましたが、其處へ此の巡回僧がやつて來て、疲勞を休めるために休息をしました。丁度晝頃だつたので、僧はお辨當を開

淨穢不二  
 綺麗ときたないとは相違がない

歸命盡十方元  
 導光如來



親 僧 寫 筆 蹟

いて食べ、お辨當箱を河の水で洗ひました。源信は側で見てもましたが、聽て、子供ながらも坊さん、お辨當箱を河の水で洗つては汚いではないか。と言ひました。すると、巡回僧は「淨穢不二、私には綺麗も汚いもない、そんなことは凡人の言ふことだ。」と答へました。源信は負けずに言ひました。淨穢不二なら、洗はなくつても宜いではないか。巡回僧はこの子供の異常な智慧に驚いて了ひました。さうして、なほ其の智慧を試してやらうといふやうな氣が起りました。丁度子供達が河原の小石をおもちやにして遊んでゐたのを見て、巡回僧は言ひました。「坊や、坊や、石を數へる時に、みな「ひとつ、ふたつ」と勘定して「つ」といふ言葉を添へるのに、十だけは」といつて、「つ」を添へないが、あれはどういふわけだか知つて居るかい。源信は二

かしげる  
かたむける

機智

得度

佛門に入り出家授戒すること

名知識

有名な僧侶

座主

比叡山延暦寺

の首僧

慈恵

長源といふ、

木津氏、近江

國の人、平安

朝中世の高僧

延暦寺の座主

永觀三年（云

望）歿、年七

十四



寸首をかしげたが、すぐ答へました。「それは五の時『いつ』と言つて、『つ』を二度言つてしまふから、十には略するのだ。」巡回僧は源信の機智に舌を巻いて驚きました。此の子は確に天才

だ。斯ういふ子供を得度させたら、

一切衆生を導く名知識となるに違

ない。斯う思ふと、巡回僧は源信の

母に會つて相談して見たくなりま

したので、源信に、「お前のお母さんに

信 源 僧  
會はしてくれ。」と言ひますと、源信は

巡回僧を自分の家へ連れて歸りま

した。巡回僧は、源信の母に、「あなた

のお子さんは實にえらいお子さん

に違ない。どうです、一つ決心して此のお子さんを出家させる氣にはなり

だ、比叡の座主慈恵大僧正のお膝許へ預けたら、きつとえらい坊さんになる

功利

功名と利慾

菩提

佛果を得ること

ませんか。」と勧めました。親一人、子一人の境涯きやうがいです。普通の婦人なら、到底

此の場合源信を手離せるものではありません。やはり家に置いて、大きく

して、役人にでもしたいと思ふのが人情です。併し、源信の母はそんな一時

的の功利的な考に捉はれて居るやうな人ではありませんでした。夫の菩ぼ

提だいのため、また自分の未來の導きとなることなら、此の際、苦しくとも、源信を

人格者に託した方がいゝと思ひ定めて、それほどお望みなら、私のたつた一

人の子ではありますがお連れ下さいまし。」と言つて、承諾の旨を答へました。

巡回僧は喜んで、それでは、比叡山に歸つてから、慈恵大僧正に此の由をお話

して、迎へに來ます。」と言つて、一旦歸つて行きました。

さて、それから五日の後に、比叡山から迎へが來ました。母は約束はした

ものの、こんなに早く迎へが來ようとは思つてゐませんでした。流石に女

のことで、名残が惜しまれたが、心を強くして、源信を促し立てて、旅立の用意

をさせました。さうして、源信を膝許へ呼寄せて、坊さんになるからには、必

ず立派な坊さんになりなさい。父のため母の爲に、えらい坊さんにならう



と決心して行かねばなりません。私はお前がえらい坊さんになるまでは、もう決して二度と再び會ひませんから、其の積りで能く修行なさい。」と言聞かせました。

源信は比叡山に登つて、慈惠大僧正のお弟子となりましたが、忽ち其の才を認められて、皆から愛されました。

其の頃、宮中と比叡山との間には交通があつて、年々法華八講のため、山から講師が宮中に伺ふ慣例がありました。源信が十五歳の時には、其の名聲が宮中にまで響いてゐましたので、時の帝村上天皇は、本年の八講の講師には、是非源信を遣はせ。」といふ言葉がありました。慈惠大僧正は、少年僧にかゝる大役は如何であらうかと思ひましたが、天皇の詔ですから御辭退もなりがたく、早速源信を宮中に差出しました。所が、案じるよりは産むが易いといふ譬の通り、源信は立派に八講を濟しました。天皇は御威の餘り、御衣を脱がせられて、源信にお授けになりました。

非常な名譽を荷つた源信は、山へ歸ると共に、母へ其の旨を告知らせる爲

村上天皇  
第六十二代  
本年  
天曆十年

一切經  
釋迦が一代に  
説法したとい  
ふ經典の總稱

に手紙を認め、御衣を小包にして國許へ送りました。暫くすると、母から小包が戻つて來ました。手紙に對する返事はありませんでした。不思議に思ひましたが、ふと源信は母と別れる時に言聞かせられた言葉を思ひ出しました。父の菩提を弔ひ、母の未來を導くやうな名僧にならない限り、再び對面しないと仰せられたではないか。それなのに、今まで自分は區々たる名利に執着してゐた。これでは母の意に副たはない譯である。斯う考へると、源信は自分の修行のまだ足りないことを悟つて、比叡の奥の横川よこがわの堂へ引込みました。さうして、一切經を讀始めました。一切經は七千餘卷もありますから、全部通讀するには五年ぐらゐ掛りませう。源信は其の大部の一切經を五遍も繰返して讀みました。母の導きとなる教が何處にあるだらうかと思ひながら、熱心に讀んで行きました。

源信が四十二歳になつた時、始めて母の導きとなるべき教が解りました。源信が山を下りて來ると、丁度向ふから母の召使つてゐた僕がやつて來ました。「どうしたのか。」と源信が聲を掛けると、僕は、「お母様が御大病で御座い

ますから、お迎へにあげりました。」と答へました。源信は、自分も今母の許へ行かうとして山を下りて來たのだ。それは丁度よかつた、すぐ急いで行かう。」と言つて、二人連立つて大和國へ歸つて行きました。

母は重い病の床に就いて、餘命は幾許もなさうに見えました。そこで源信は母の枕邊にひざまつ跪き、お母様の導きとなる教がやつと解りました。それはたゞ『南無阿彌陀佛』とお唱へになることです。」と申しました。母は之を聞いて、涙を流して喜びました。さうして、すっかり安心して、南無阿彌陀佛といふ六字の名號を唱へながら、眠るが如き往生を遂げたのであります。

源信は、その後、一切經讀破の賜物として、往生要集六卷を編みました。此は非常に多くの人を益した本であります。往生要集が宋の皇帝に獻せられた時、皇帝は手に數珠を掛けて、『南無源信大菩薩。』といひながら伏拜まれたさうです。

#### 四 喜 悅

野口米次郎

秋の西日が窓を射る部屋の中を

私は前へ二足後へ三足と歩きながら

(なんだか過去の幽靈が私の脛にこびりついて來るやうに感じる)

がさと音する落葉にも氣を付け

カーテンを動かす冷たい風にも耳を敬て

喜悅Curianがこの部屋へ遣つて來るのを待つてゐる

あゝ私は待ちくたびれ

部室の窓を開けて外を眺める……

おやこれはしたり 派手な帽子を被りステッキ片手の喜悅殿は

横目で私の部屋を睨みながら知らない顔をして行過ぎる

「おい君 僕の家を忘れたかね」と私が叫ぶと

喜悅は振返り僕に答へて言ふ

「僕は君を忘れはしない 君の名前は憂鬱といつたつけ

白狀するが 僕は君の顔を好かない それで今日は御免を蒙る……

だが僕の訪問が希望とならば  
夜を東から破る太陽のやうに君自身大きく笑つて  
白い地上の露に朝の歌を歌はせて見給へ  
その時僕は君と膝を交へて語らうよ

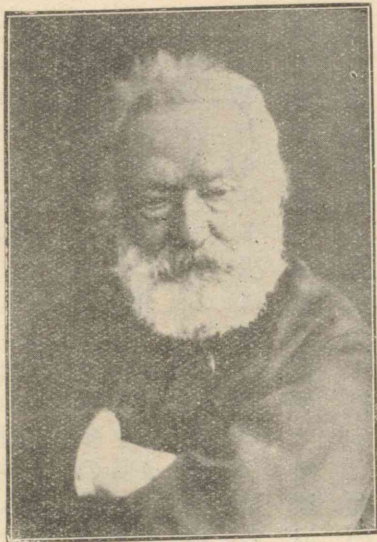
### 五 同胞兄弟

僧正は僧侶の中でごく高い身分である。當時此の國の官制では、陸軍大將のすぐ次に位する格式となつて居る。今旅人が戸を開けて入つた此の家の主人は、其の僧正なのだ。十年前に此の地の寺領を預つて以來、ミリイ<sup>Myriai</sup>ル先生と云ふ名が殆ど慈善の神様のやうに思はれて居る。齡は本年七十五歳家族としては、自分より十歳ほど年下の妹と一人の老女とだけである。始めて此の土地へ赴任して來た時、すぐに貧民病院を見廻り、其の建物の狭くむさくるしいのを見て、廣い立派な自分の官宅と取換へた。「何も三人の家族に廣い住居はいらぬから、それよりは、大勢の貧しい病者にゆとりを與

此の國  
フランス

フラン  
我が國の約三  
十九錢

ユーゴー  
フランスの詩  
人・脚本家・小  
説家 1802-18  
85)



へるがよい。」との意見に出たのだ。此の一事でも、大方其の人柄は察しられ  
る。年々政府から受ける俸給が壹萬五千フラン、其の内一萬四千フランま  
でを年々悉く慈善事業に寄附し、自分は單に一千フランと、妹の身に附いた  
所得五百フランとで、極めて質素に暮して居る。是では餘りひどいからと  
いふ老女の苦情で、別に地方政廳か  
ら馬車代として年三千フランを受  
けることになつたが、此の三千フラ  
ンもすぐに他の慈善事業へ一切寄  
附することに取極めた。是からと  
云ふものは、土地の人が徳に感じて、  
總べて恵み金の類をば此の僧正の  
手に託するやうになつた。是がため、年々僧正の手を經る金額は實に夥し  
い。けれども、援ける豊かな人よりは、どうしても受ける貧しい人の方が多  
いから、一錢でも僧正の爲にはならぬ。そればかりでなく、時々分與へるの

に不足して、自分の乏しい家計をそれに廻すことがある。

凡そ人の難儀とあれば、どのやうな危険を冒しても之を救ふ。此の點では、慈善家であるばかりでなく勇者である。けれども、世間一般の宗教家のやうに、決して厳しい意見は持たない。本來由緒のある家に生れ、華美と贅澤の中に育つた人で、たゞ革命の亂の爲に家を失ひ、亂をイタリへ避けて居る中、最愛の妻に死なれ、それがため痛く世をはかなみ、發心して宗教に歸したとのことである。だから、若い時には、普通の俗人と同じやうな行をしたのであらう、多少は過もあつたであらう。それは自分で常に言つてゐる。随つて、人に説く意見も柔かだ無理がない。先づかうだ、人は誰でも、肉體と云ふ重い荷物を背負つてゐる。此の荷物が常に欲心や過の基となるから、油斷なく之を見張つて居らねばならぬ。出来るだけ之を抑へ付けて、之に勝つやうに努めて、萬々止むを得ないやうになつたら、之に従へ。従へば罪となるのだ。けれども、全く止むを得ない場合なら許されよう。轉んで膝を突くのは仕方がないから、すぐに其の突膝で神に縋り、膝から上は墮落し

ないやうにせよ。完全と云ふことは神より外に期せられないから、人はこれを望むべくもない。人はたゞ正直にしなければならぬ。たとひ過つて罪を犯しても、決して正直を忘れるな。一所懸命に罪を少くするやうに勉めるのが人の道だ。全く罪のないのは神ばかりだ。罪とは肉體に籠つてゐる引力のやうなものだ。と、誠によく人情を噛分けた穩かな意見である。人の服するものも無理はない。此の夜、僧正は夕方の散歩から歸り、室に閉籠つて書き物をしてゐた。所へ、夜食の用意が出来たと見え、老女が來て、戸柵から銀製のスープ皿を出して行つた。スープ皿が銀製だとは、此の平民主義の僧正に不似合だけれども、此は先祖から傳はつてゐる大切な寶物で、僧正には此の銀の皿でスープを吸ふのが唯一の贅澤である。皿の數は都合六枚の一组で、其の外に銀の燭臺が二本ある。此も親類から記念として受けたので、いつもストーヴの上の柵に一對揃へて置いてある。客のある時に用ひるのだ。規律の能く立つた家だから、皿が來れば直ちに食事だ。僧正はさうと知つて、書き物を止めて勝手に行く。此處は食堂をも玄關をも

兼ねて居る。戸を開けばすぐに往來だ。不都合な建物ではあるけれども、貧民病院を其のまゝ住居に用ひて居るのだから仕方がない。此の時、老女は僧正の妹に向つて、宵に買物に出た時、町で聞いて來た恐しい旅人の話を頻りにして居る。「何でも十九年も長い間懲役にゐた奴だと言ひますから、屹度今夜何處かへ泥棒に入りますよ。町中ではもうみんな怖がつて、戸を閉ぢてゐます。此のお家でも、入口の掛金と戸棚の錠前を拵へなければなりません。銀の皿を盗まれては大變でございます。」

僧正は此の話を聞きながら、卓子に向つて坐した。丁度此の時である、外から旅人が戸を叩いたのは、すぐに僧正の口から、「お入りなさい。」といふ返辭が出た。僧正は、どのやうな場合でも、音なふ者さへあれば、誰彼の差別なく、必ず斯う返辭をするのだ。僧正の家には、祕密もない、都合もない。難儀する人は救ひ、乞ふ人には與へ、自分の住居を自分の家とは思はず、財産に就いても全く自分と云ふことを忘れて居る。返辭に應じて入口の戸は開かれた。開いた人は殆ど決死の心とも云ふべきだ、此處で救はれねば救はれ

る處はないと云つた體だ。彼は突として入つた。背には囊を負ひ、手には杖を持つて居る。風體の尋常でないのは言ふに及ばず、野卑な、大膽な、疲勞した、そして、亂暴らしい顔が突然燈光の前に現れた。

此の旅人は其の筋から銘を打たれて居る通り、全く油斷のならぬ奴である、眞に恐るべき人間である。燈光の前に立つた其の顔の凄さ、其の姿の恐しさ、老女も僧正の妹も、我知らず逃げようとするが如く立上つた。若し日頃から僧正の感化を受けてゐなかつたら、兩女は必ず同時に叫聲を發したであらう。唯泰然として靜かなのは僧正である、驚きも騒ぎもせぬ。僧正の此の靜かさに化せられて、妹はすぐ席に復して僧正の顔を眺め、老女は立つたまゝ棒のやうになつて居る。頓て僧正は來客に向ひ、穩に其の顔を見て何か問はうとした。客は問はれるのを待たず、周章<sup>あわ</sup>てたやうな高い調子で、「御免下さい。私の名はジャン・バルジャンと云ひます。私は懲役人です。十九年の間ツローンの監獄で懲役を勤め、四日前に出獄を許された者です。今日は朝から十二リグ歩き、疲れ果てて此の土地へ着いたけれども、飯食

ツローン  
フランス南部  
の町、地中海  
に臨み、軍港  
がある  
リグ  
一リグは我  
が國の一里八  
町餘

ふ處も寝る處もありません。行く先々で皆斷られ、仕方なしに此の家の外の石の上に寝てゐたら、教會から出た婦人が、此の家の戸を叩いて見よと教へてくれました。それだから叩きました。泊めて呉れますか、呉れませんか。此の家は宿屋ですか何ですか。錢は斯う見えても持つて居りますよ。十九年の間、牢の中で溜めた工錢が百九フランと十五サンチーム、四日の旅で、二十サンチーム使つただけです。宿賃は拂ひますが、泊めて呉れるのですか、呉れぬのですか。

此の返辭が何より先に聞きたいのだ。又も失望するのが厭だから、彼は第一着に自分の履歷をさらけ出した。僧正は人を斷つたことがない。返辭しないで解つて居る。すぐに老女に向つて、例の通り靜に、さあ皿を出しておくれ。といった。此の者のためにもう膳立を命ずるのだ。彼に取つては實に意外だ。何も問返さず、すぐ膳立とは何かの間違ではあるまいか。彼はつか／＼と又一入燈光の近くに進んで、忽然と踏止り、お待ちなさい、お待ちなさい。今私の言つたことが解りましたか。私は懲役人ですよ、罪人

サンチーム  
一フランの百  
分の一

ですよ、牢から出されたばかりですよ。僧正は又老女に向ひ、新しい敷布を出して、寢床の用意もしておくれ。僧正の言付には、一言もなく老女は従ふのだ。唯々として次の室に去つた。僧正は始めてチャンバルチャンに向ひ、さあ、あなた、こゝへ坐つておあたりなさい。丁度私共も是から食事を始める所ですから、御一緒に致しませう。何と云ふ丁寧な言葉だらう。而もそれはわざとでなく、自然である。チャンバルチャンは始めて泊めてくれることと合點がいつた。けれども、あなた、あゝあなたなどと呼ばれるのは今まで覚えのないことだ。泊ることの出來たのは無論嬉しく感じるけれども、どうも此の待遇が怪しい、合點が行かない、殆ど恐しいぐらゐだ。彼は暫しが程は口も利けなかつた。何か言はうとしたけれども、吃つて語を爲さない。

其の中に、老女は銀の皿を出して來た。チャンバルチャンは席に着いた。僧正は老女に向ひ、何だか燈光が暗いやうだ。と言つた。是は銀の燭臺を持つて來いと云ふ心だらう。老女がさう心得て去らうとすると、皿も是では

足りないだらう。」と言足した。六枚を残らず出せとの謎である。此のやうに盛徳限りない高僧でも、子供のやうな稚氣がある。尤も子供のやうな心だから、自然に其の徳が高くなるのであらうけれども、皿と燭臺を客に見せるのを日頃から一方ならず歡ばしく感じる様子である。チャンバルチャンは既に「あなたと呼ばれて異様に心がとろけて居る上に、斯様な扱ひを受け、嬉しさと怪しさがいつ終るか解らぬ。」牧師さん、いや牧師さんかたゝの坊さんか知らないが、まあ牧師さんと言つて置かう。牧師さん、貴方は世間の人のやうに、私を追拂ひもせず、銀の皿や銀の燭臺を出して、お客扱にして下さつて、私はもう何も貴方には隠しませんよ。」と、身の上話でも始めさうである。僧正は遮るやうに、「なに、何も私に話すには及びません。此の家は私の家でなく、私が此の家の主人でないのですから。」え、え、此の家は誰でも難儀をする人の家です。行暮れて惱む人が此の家の主人です。」此の言葉が若し心の底に沁込まねば人でない。いや、鬼でさへもない。チャンバルチャンは殆ど呆れた體である。僧正は更に語を繼いで、「あなたの名前も聞

黒岩涙香  
名は周六、高  
知縣の人、萬  
朝報社長、大  
正九年歿、年  
六十

島崎藤村  
名は春樹、長  
野縣の人、明  
治五年生、詩  
人、小説家

かぬ内から解つてゐます。」え、聞かぬ内から、はい、我々の同胞兄弟と云ふのです。」あ、此の者を同胞兄弟眞に僧正の心は人の心でなく、神の心と云ふものだ。(黒岩涙香譯「噫無情」)

六 柳並木

島崎藤村

「家の前はすぐ河岸で、石垣に沿うて段々を下りられるやうになつてゐる。そこは淺草橋と柳橋との間に挟まれた位置にあつて、河口に碇泊する多くの荷舟からは、朝餐の煙の登るのも見える。白壁柳並木などの見える對岸の石垣の下あたりには、動いて行く舟もある。」

これは、私が小説の中に書いた一節であるが、この位置は、日本橋區の方から見た神田川の河口で、往時、船宿が軒を並べ、行燈を懸け連ねてゐたといふ場所である。對岸は淺草區の領分で、釣船屋、米穀の問屋、閑雅な市人の住宅などが、柳並木を隔てて水に臨んでゐる。私が今住む町は、妙に細い路次の多いところで、二三軒置いては必ずこの小路があるから、どの抜道を取つて

も、私は神田川の方へ出ることが出来る。朝に晩に、私は河岸の方へ歩きに出掛ける。

いつぞや、或新聞記者が訪ねて来て、半日の日記を求めたから、私は好んであの河岸を散歩することを書いた。すると、K君といふ未知の人から手紙を貰つた。K君はやはり私と同じ河岸を好んで歩く人であつた。手紙の様子で見ると、K君は、三年ばかりも前から柳並木の蔭を往來してゐる。吾儕二人は互に逢つたこともないが、同じ場所を見付けたといふことだけでは、不思議に一致した。

それから、K君は私に逢ひたいと言つて來た。この節、私はあまり人に逢ひ過ぎると思ふから、そのことをK君へ書いて、未知の友の一人として君の名を記憶したい。吾儕二人は互に同じ柳並木の蔭を楽しもうではないか。斯ういふ意味の返事をした。

十月初旬のことであつた。私はK君から葉書を受取つた。

今日の夕闇に、久しぶりで例の河岸を歩きました。頬へ觸れるまでに

低く垂れさがつた枝葉の青い香を嗅いだ時には、何故とも知れぬ懐かしさに胸が躍りました。彼處の樹蔭には石が御座いませう。あの上に私は腰を掛け、膝の上に頬杖といふ形で、貴方が其處を歩かれる時のことを様々に想像して見ました。

若々しい筆跡で斯う認めてある。猶逢ひたいといふ望みは強ひて捨てたと附記してあつた。

それから、私は河岸へ歩きに行く度に、K君のことを思ひしした。K君から見れば、河岸は私だ。私から見れば、河岸はK君だ。斯う私は思つた。なんぞといふと、私は訪問の客に隨つて、その河岸まで歩いて行くのが癖で、或日も、瓦町に住む某君を送りながら、例のやうに家を出た。吾儕は柳の下に蹲踞しんで、種々なことを語り合つた。印象と記憶の關係や……夕方に浅草橋の下を流れる水の色や……波に映る灯や……

其の時、某君と私は、岸に繫いだ舟の方へ運ばれる病人を見た。水の上に住む人達と思はれた。病んでゐるのは年を取つた女で、倉と倉との間にあ

瓦町  
浅草區



る細い路次の處から出て来た。醫師の許へ通ふのであらうと思つて見てゐると、病人は人々の肩にかゝつて、石段の下へ移されて行つた。舟の上には、女の兒が三人ばかり遊んでゐた。暫時吾儕の心は斯の光景から離れることが出来なかつた。

十月の中旬、私はK君から葉書を受取つた。逗子から出したものだ。その中に、海は青く光つてゐますが、それを見ても、別に斯うといふ考も湧きません。例の柳並木の方が寧ろ静かです。こんなことが書いてある。K君と私とは、たゞ同じ水を眺め同じ土を踏むといふだけの交に過ぎない。他に吾儕は互に書くことがない。例の柳並木——それで吾儕の心は通ふやうな氣もした。

十一月に入つて、K君から長い手紙が来た。それには、若い人に有勝な、憂鬱な心の境が細々と書いてあつた。その時は、私は急に返事も出さなかつたが、河岸へ行くと、其の手紙を胸に浮べて、K君といふ知らない人——まあ私の想像では十七八の青年のことを思つて見た。

「物象の明かな時が来ました。柳並木も枯れへになりまして。今朝も河岸を歩いて、君から来た手紙を胸に浮べました。」

斯う簡単に私は葉書に書いて、K君の許へ出した。今度は更に長い返事が来た。

「先日、あのやうな手紙を差上げましてから、私は非常に懊惱いたしました。定めて妙な奴だとお笑ひで御座いませう。……實に自分で自分の愚かさを笑はずにはゐられません。……私には母もあり、兄弟もあり、友人もありませんけれども、何故か、始終堪へ難い程の淋しい生活を送つてゐます。殊に先日あの手紙を差上げてからといふものは、以前よりか一層淋しく頼りなく感じ、夜も碌々眠られぬほど思ひ悩みました。……あれから柳並木を二度ばかり歩きました。黄ばんで縮れ返つた葉の力なさを見ると、何となく傷ましい思に包まれます。……人々は此の頃の物象を何ういふ眼で觀てゐるでせうか。私の心は矢張哀愁から離れることが出来ません。私は何故物事を楽しく愉快に見聞し且思ふことが出来ぬの



彈【彡】形影【彡】役  
從御復徭後徐徑徒得  
心必忌忍志忘忙忠快念  
忽怒思急怨怪怪恐  
恥恨恩恭息悅悔悟患悲  
悼情感惜惠惡憤惱想愁  
愉意愚愛感慈慈慕憐慢  
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲  
憶憾憤懇應懲懷懸戀  
【戈】成我戒威戰戲戴  
【戶】戶戾房所【手】手才  
打托扱扶批承技抑投抗  
折抱抵押抽拂拍拒拓拔  
拘拙招拜括拳拾持指振  
捌捕捧拾掃授掌排掘掛  
探探控推接提揚換握揭  
揮援損搖搜摘携摩撫擇  
擊操據據擬攢攝【支】支  
【支】收改攻放政故效效

教敏救敗敢散敬敷敷數  
【斤】斤斤斬新斷【方】方  
施旋旋旋旋【无】既【日】  
日且旨早旬旭昇昌明易  
昔星春昨是時晚晝普景  
晴晶智暇暖暗暑暮暴曆  
曇曜【日】曲更書曹會替  
最會【月】月有朋服朕朝  
望朝期【木】木未末本札  
朱机朽杉李材村杖束栉  
杯東松板枕林枚果枝枯  
架柄某染柔杏栝柱柳栗  
校株根格栽桃案桐桑桶  
梅條梨梯槭葉棋榭柳棟  
森棺植楠葉極榮構概樂  
榭樓標樞樞欄欄【欠】欠欲  
橄橄檢櫻欄欄【止】止正  
款款歌歌歡歡【夕】夕死歿  
此步武歲歷歸【夕】夕死歿

殊殉殖殘【爻】段殺殺殿  
毀【母】母每毒【比】比  
【毛】毛毫【氏】氏民【气】气  
【水】水水永永汗求汗汗  
江池洩汽沈沒沖沙河沸  
油治沼沼沈沈泊法波泣  
泥注泰泳洋洗津洪洲活  
派流浦浪浮浴海浸消涉  
液淑淚淡淨淫深混清淺  
添減渡溫測港渴游湖湧  
湯源準溝溢溶溺滅滋滑  
滯滴滿滿漂漂漆漏演漕漢  
漢漫漸漸潔潛潮澤激濁濃  
濕濟濫濫瀧瀧灌灌【火】火  
灰災炊炎炭烈烏無焰然  
煉煎煮煙煤照煩熊熱熱  
燃燈燒營燭燭【瓜】瓜  
爭爲爵【父】父【片】片版  
牌牌【牙】牙【牛】牛牧物  
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狼猛貓猶猿獄獨獲  
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉  
王玩珍珠班現球理琴  
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘  
【生】生生產甥【用】用  
【田】田由甲申男町界畏  
烟畔畜畝略番畫異雷當  
疊【疋】疋疋疎疑【疋】疋  
疲疾病症痕痘痛痢療  
【天】登發【白】白百的皆  
皇【皮】皮【血】血益益盛  
盜盟盡盤【目】目盲直  
相省眉看真眠眺眼着睡  
督睦瞭【矢】矢知短【石】石  
石砂砲破研硬硯碁碎碑  
確磁磨礮【示】示社祈祕  
祖祝神稟祭祭禍福禦禮  
【禾】禾私秋秋秒租租秩  
移稅程程種種稻稼稿穀  
積穗穩【穴】穴究空穿突

窃窺窺窺【立】立章童端  
競【竹】竹竿笑笛笠符第  
筆等筋筒答策筒算管篇  
箱節範築篤筒簿籍【米】米  
米粉粒粘粗粟粹精糖糞  
【糸】系紀約紅紋納純紗  
紙級紛素紡索紫累細紳  
紹紺終組結絕絞給給統  
絲絹經綠維網網綫綫綫  
緊緒線綠維編緩緯練縛  
縣縫縮縱總績繁織繕繪  
繭繅繼纂續【任】缺【网】网  
罪置署罰罵罷羅【羊】羊  
美羣義【羽】羽翁翬習翼  
【老】老考者【而】耐【耒】耒  
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲  
職聽【肉】肉肋背肝股肥  
肩背脊香肺胃背胎胞胴  
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐  
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膽臆臆【臣】臣臥臨  
【自】自臭【至】至致臺  
【日】日與舅與舉舊【舌】舌  
舌舍【舛】舛舞【舟】舟航般  
舵船舶艇艘艦【良】良  
【色】色【艸】艸芝花芽芳  
苑苗若苦莢茂茶草荒荷  
莊莖菊菌菓菜華菽萬落  
葉著葬蒔蒙蒸蓄蓮蔓蔭  
薄薦薪藍藏藏藤藥蘇  
【虫】虫虎虐處虛虜號【虫】虫  
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠶  
【血】血血行【行】行術街衝  
衝衝【衣】衣表衰袂袋袖  
被袴裁裂裏裕補裝裸製  
複襖【西】西要覆【見】見  
規視親覺觀【角】角角解  
觸【言】言訂計討訓託託  
詠訪設許訴診詐詔評詞  
詠詠試詩詩話詳誅誇誌

認警誕誘語誠誤誦說課  
誼調談請諒論諫論諸諾  
謀謁謂講謝諂諂諂諂識  
譜警譯議護譽讀變讓  
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豕  
象豪豫【貝】貝貞負財貢  
貧貨販賈責貯貳貴賈貨  
費賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
賞賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈  
【赤】赤赦【走】走赴起超  
越趣【足】足距跡路踣踣  
蹟踣躡【身】身【車】車軌  
軍軒軟軸較輶輔輝輝輦  
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯  
【辰】辰辰農【毛】毛込辻迎近  
返迫迷迷迷迷迷迷迷迷  
透透途途途途途途途途途  
逸逸途途途途途途途途途  
遞遞遠遠遠遠遠遠遠遠遠  
還邊【邑】邑那邦邪邸郊郎

郡郵郵郡鄉【酉】酌配酒  
酢酬醕醕醕醕醕醕醕醕  
【里】里重野量【金】金釜  
釘針鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞  
銘銘鋒鋒鋒鋒鋒鋒鋒鋒鋒  
鎖鎖鏡鏡鏡鏡鏡鏡鏡鏡鏡  
長【門】門閉開開開開開  
閱閱關【阜】阜附附限限限  
陣陣除除除除除除除除除  
隅隅隆隆隆隆隆隆隆隆隆  
險險隱【隹】隹雀雀雅雅集  
雌雙雙離離離離離離離離  
零雷雷雷雷雷雷雷雷雷雷  
【青】青靜【非】非【面】面  
【革】革靴鞍【音】音響  
【頁】頁頂項順須頤頤頤頤  
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤  
顧顧顯【風】風【飛】飛  
【食】食飢飢飯飯餽餽餽餽  
餅餅館館【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駈駐騎騰騷  
驅駢驗驚驛【骨】骨髓體  
【高】高【髟】髮【門】闕

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉  
鯛鯉【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄  
【國】國【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黃】黃【黑】黑默  
點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】  
鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと (二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし  
外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞およ  
び助詞はなるべく假名で書くこと (四)外來語は假名で書くこと

(三) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勸勸 榘榘 滙滙 欽欽 觀觀  
沢澤 挾挾 訳訳 馱馱 积积  
変變 恋戀 蛮蛮 湾湾 莖莖  
徑徑 経経 軽軽 併併 堀堀  
瓶瓶 餅餅 研研 齊齊 齋齋  
濟濟 劑劑 殘殘 淺淺 賤賤  
錢錢 勞勞 管管 榮榮 學學  
覺覺 萃萃 譽譽 断断 繼繼  
齒齒 齡齡 湿湿 頭頭 窓窓  
総總 屬屬 囁囁 為為 偽偽

帶帶 滯滯 參參 慘慘 兩兩  
滿滿 發發 廢廢 胤胤 獵獵  
乱乱 辭辭 潜潜 贊贊 走走  
徒徒 從從 縱縱 惱惱 腦腦  
処処 扱扱 担担 胆胆 未未  
麥麥 壽壽 鑄鑄 数数 楼楼  
樂樂 藥藥 讀讀 統統 竜竜  
滝滝 隨隨 髓髓 廉廉 厩厩  
聴聴 廳廳 虚虚 戲戲 遲遲  
解解 独独 觸觸 疊疊 撰撰

虫虫 蚕蚕 仮仮 兎兎 兎兎 刺刺  
励励 骨骨 管管 国国 困困 円円  
図図 壺壺 壹壹 実実 写写 宝宝  
扣扣 叙叙 絞絞 条条 様様 帰帰  
気気 炉炉 爐爐 儀儀 献献 画画  
苗苗 留留 尽尽 礼礼 称称 糸糸  
欠欠 缺缺 声声 台台 壺壺 旧旧 万万  
号号 証証 證證 豊豊 弁弁 通通 透透  
辺辺 邊邊 医医 鉄鉄 関関 関関 双双  
靈靈 靈靈 余余 餘餘 館館 館館 体体 體體 開開 開開

塩鹽 点點 党黨 龜龜

大正十三年二月一日印刷  
大正十三年二月五日發行

代價業	國語讀本	昭和二年臨時定價
卷一六	定價金四拾四錢	金七拾五錢
卷七十一	定價金參拾九錢	金六拾六錢

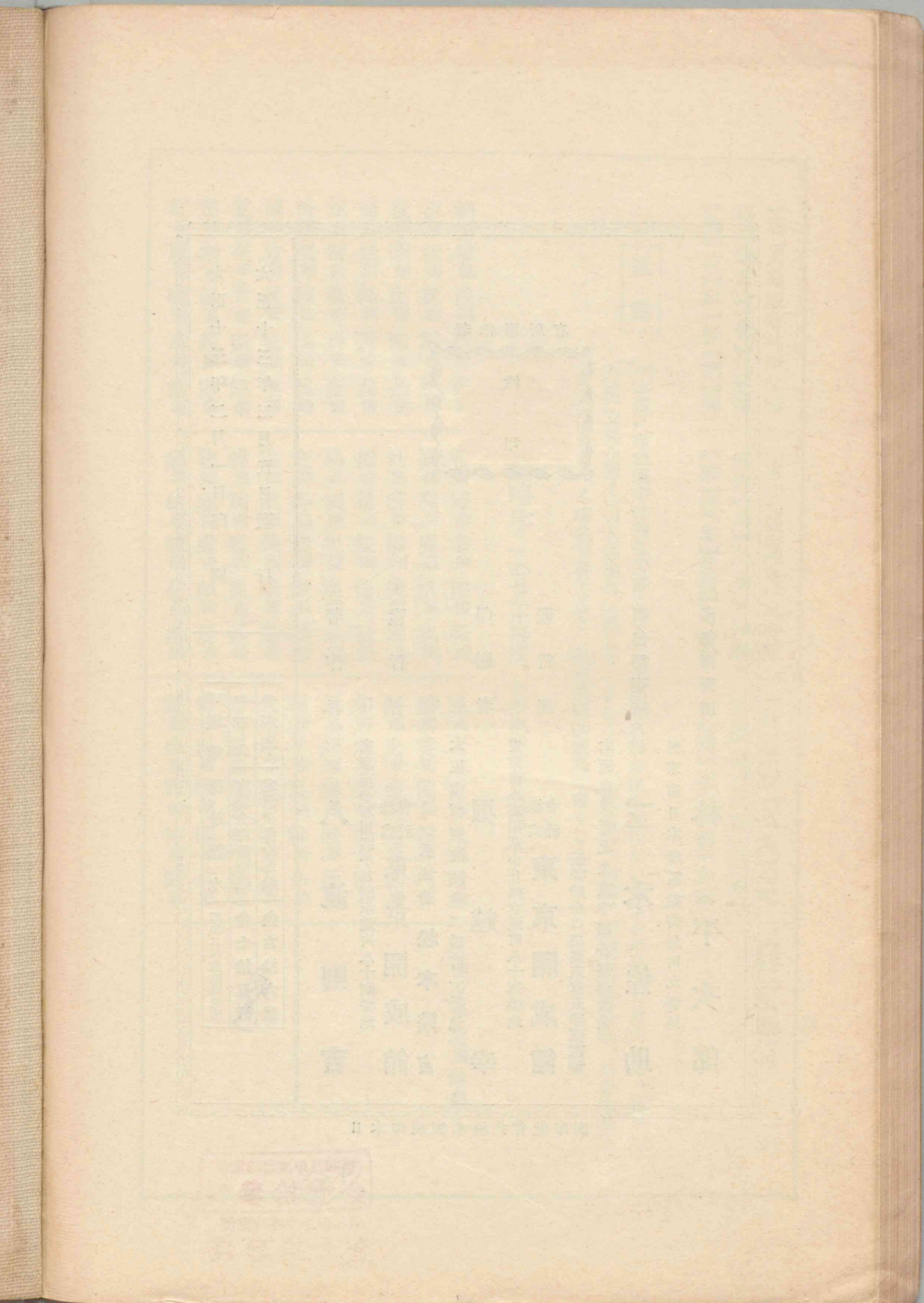
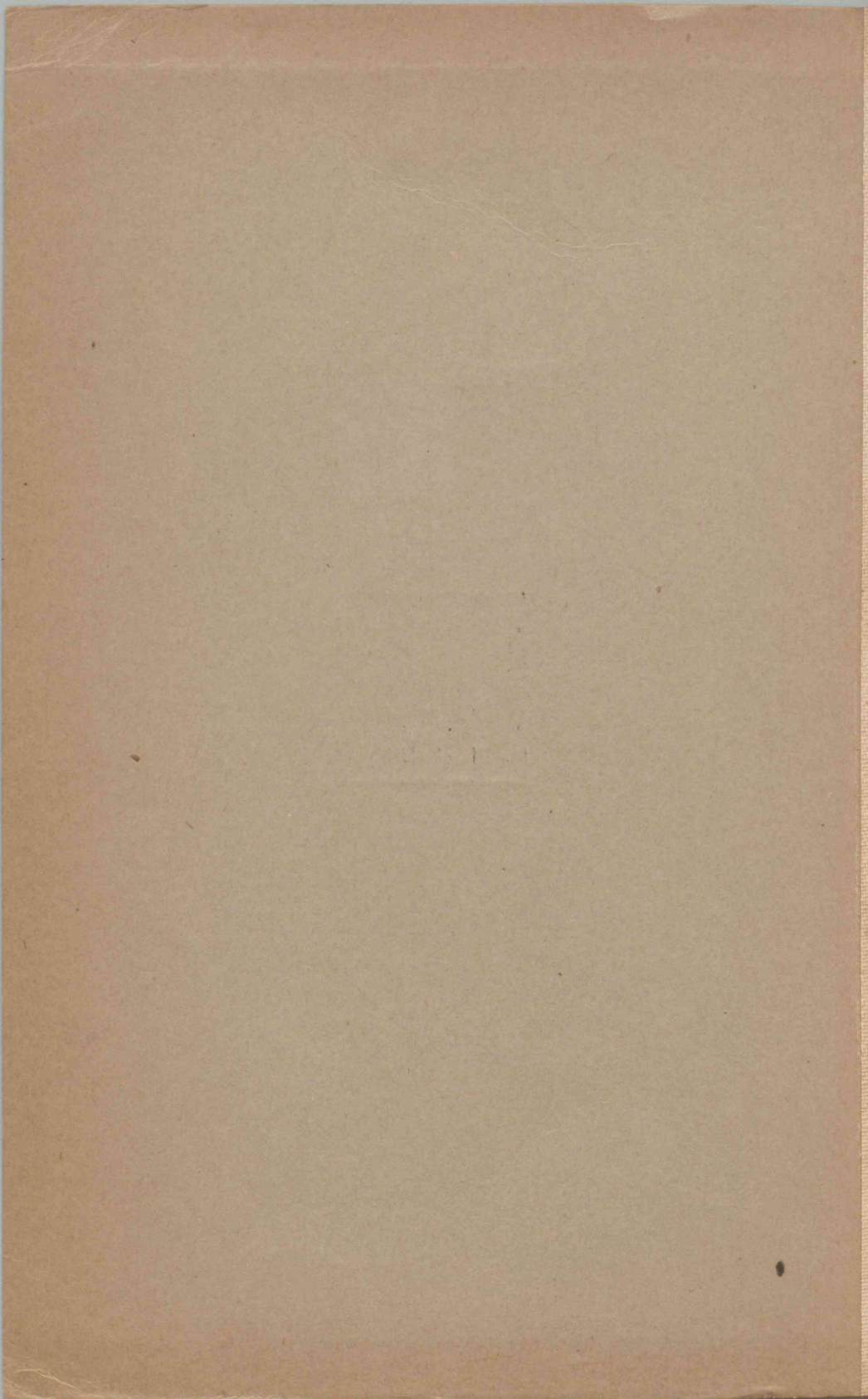
著者所有



著者 八波則吉  
發行所 株式會社 東京開成館  
大阪市小石川區小日向水道町八十四番地  
代表者 松本繁吉  
印刷者 堀越幸  
大阪市西區阿波座二番町一番地  
發行所 株式會社 東京開成館  
東京市小石川區小日向水道町八十四番地  
振替貯金口座東京第五參貳貳番  
大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角  
西部販賣所 三木佐助  
東京市日本橋區數寄屋町九番地  
東部販賣所 林平次郎

刷印社會式株本製刷印本日

昭和三年度臨時定價  
金七拾參錢  
昭和四年度臨時定價  
金七拾參錢





広島大学図書

2000047790



文庫  
24  
790